
バク（休止中）

哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バク（休止中）

【Nコード】

N3338D

【作者名】

哲也

【あらすじ】

可愛いけれど可愛くない妹の朔。その朔の見る悪夢を喰うようにノートに刻んでいく姉の麻子。朔の見る悪夢が最悪の現実と麻子は気付いて……………

1・夢喰い（前書き）

見ていてくれた皆様、どうもすいません。これまでの間は間違っ
てしまいました（涙）。頑張っ
て書き直します……。

1・夢喰い

私には七つ離れた妹がいる。朔と言うのだがこれが可愛くない。

三白眼の目は何時も私を睨みつけているようで、時々なんでもないので引つ叩きたくなる衝動に駆られる時がある。こうやって言うとなんて酷い姉なんだろうと思われるだろうが、いやいや、これが本当に可愛くない妹なのだ。人が折角真心込めて作った食事にケチを付けるのは日常茶飯事で、私が唯一楽しみにしている家事の後のテレビドラマにまで「くだらない」と一言の下に斬り捨て自分の部屋に戻っていく。九歳のお前に大人の色恋沙汰の一体何が分かるのだと言いたいのだが、余りに威風堂々とした後姿に私は何も言えなくなってしまう。

真っ白のふわふわのホイップクリームみたいな頬つぺたに、苺マシユマロみたいな柔らかい唇。栗色の髪はパーマも中ててないのに毛先が内側へくるくる丸まっている。

何の間違いか我が家に生まれてしまった可愛いけれど可愛くないお姫様は、時々とても可愛くなる。そしてそんな時は決まって私は訳の分からないものに襲われるのだった。

高校二年生ともなると先のことが見えてくる。

私は高校を選んだ時のように大した動機もなく大学を選び、やっぱり同じように会社に就職して、多分一人の男性を選び結婚するんだろう。そしてささやかで平凡だけど幸せな一生を終えて土に戻るのだ。

そう言った未来への願望、それと反対のベクトルにあるそこはかとなし不安。それに良く似たものが私を襲うのだ。

それが予兆なのだと気付いたのはつい最近の事で、そんな時は決まって朔が私の部屋に尋ねてきて、あの小憎らしい態度が嘘のように震える子犬みたいな目で私を見つめ、

「お姉ちゃん一緒に寝ていい？」

そう尋ねるのだった。私もそんな夜はどうにも一人で眠るにはどうにも寂しく、ベッドに朔を招き入れ二人抱き合って眠るのだ。でもそれは精々二時間か三時間位のもので、たらたらと脂汗を掻きながら朔は必ずうめき声を上げて苦しみだす。私がそれに気付いて揺さぶり起こすと、

「また見た」

朔は震えて泣きながらそう言い、訥々と夢の内容を話し続けたのだった。

夜が白む頃に話は終えて、朔は何事も無かったようにふらりと私の部屋を出て行き自分の部屋へと戻っていく。私は眠い目を擦りながら学習机に座り、一冊のノートを棚から取り出して朔の見た夢を書き綴っていく。

ペンを走らせながら何時も思うのだが、私は案外この作業を気に入っているんじゃないだろうか。気付くと何時も鼻歌を歌っているのだから。

もともと、朔の見る荒唐無稽な夢が羨ましいとは思わないが・・・

2・朝

寝不足の目を擦りながら味噌汁を作っていたらお湯を足さないと飲めない代物が出来てしまった。何を言われるか分かったもんじやないと思っていたのだが、朔は一睨みしただけで何も言わなかった。今朝の今朝だから少し気恥ずかしいのかもしれない。もっとも帰ってきたら何時もの朔なんだけど。

「ねえ、朔」

「なんだ」

まだ味噌汁が濃かったと見える。顰め面して朔はポットに小さな手を伸ばした。薄味が好みだからなあ、朔は。

「たまにはパンが食べたいなって思わない？」

「日本人が白米食べないでどうするんだ」

にべもなく断られた。食べたいなあ、焼きたてパンにたつぷりマーマレードを塗った朝ごはん……。

そんな風に何時の間にか私達は大した会話もしくなっていて、黙々と朝食を終えるようになった。朔は洗面所で歯を磨くと自分の部屋へ身支度を整えに舞い戻り、私は時計を気にしながら洗い物を片付ける。そうこうしている内に朔の登校時間がやって来て、二階から部屋の戸を閉める静かな音が響く。私は慌てて手を拭い、小走りに階段へ向かう。まるで私は朔の面倒を一手に引き受ける逸事のようなのである。

足元を確かめながら朔がゆっくりと階段を降りてくる。早生まれもあってか、朔は同年代の子たちよりずっと小さい。我ながらまったく姉バカだと思うのだが、もしかして朔はずっと小さいままなのではないのかと心配してしまう。出来ることなら私の無駄に高い身長を分けてあげたいと、インターネットでそんな外科医はいないかと真剣に探した私は、やっぱり真性の馬鹿者に違いない。

しかし

白の半そで綿シャツに黒の釣りスカートが余りに朔に似合わない。キヤラメル色のランドセルがまた可愛らしいだけにがっかりしてしまう。私もかつて着た学校の制服は何と言うか……、そう、色気が足りない。昨今の情勢から見ると小学生に色気を求めるのはちと危険なのだが、もう少し華を添える何かがあってもいいのではないかと私なりに愚考する。

「忘れ物ない？」

玄関先で私は何時ものように朔にそう尋ねた。靴のつま先をコンコンと床のタイルに軽く打ちつけながら、朔は頷く。学業の事で朔は私に面倒をかけた事がない。その辺りは自慢じゃないが私に似て優秀だ。

と、思ったら、

「そうだ、忘れていた」

ランドセルを下ろすと中をこそごと探り、朔は四つ折にした紙を差し出してきた。

「期待はしてない。いつてくる」

「いつてらっしゃい」

まるでランドセルに抱えられたような朔の小さな背中がゆっくりと閉まるドアに隠れるまで見送ると、私は渡された紙を開いた。

「あ、もうこんな時期なのか」

私にまた一つ懸案事項が追加された。

「おう、洗濯物が喜んでいる」

また奇怪な表現をしてしまった。メグが伝染ったに違いない。昨日までの土砂降りの雨が嘘のような青空だった。風は二階のベランダにずらりと並んだ洗い立ての洗濯物を揺らし、太陽がまたそれを際立たせ輝かせている。まったく爽快な風景だ。朝っぱらから洗濯機を唸らせた甲斐があったってmondだよ。朔が五月蠅いと怒る

かなあと思ったけれど、無い胸撫で下ろす事に何も言われなかったし。梅雨で始末しきれない溜まりに溜まった洗濯物の数々や、洗っても仕方なく部屋干しするしかない、そんな見苦しい家にいるのは朔も余程嫌だったんだろう。

可哀想だけど、可愛い朔も見れたし、洗濯物も片付いたし、今日は良い一日になりそうだなあ！ 等と喜ぶのは程ほどにして、私は玄關の戸締りはちゃんとしたか確認すると自転車に乗って学校に向かった。

何時ものように桜並木のトンネルを潜り、市内を横切る川の堤防沿いを走っていく。桜の花はとうに散ってしまっていて、緑の葉が色濃くなる季節を迎えていた。天気予報は梅雨明けは例年通りと言っていたけれど、どうなんだろう。風はこの季節には珍しく乾いて涼しく、空は突き抜ける青さだ。完璧な風景、と言うにはちょっと残念な事に、昨夜までの大雨が祟って川の色は土砂で茶色く濁っていた。

『程好く完璧なのが丁度良いんだ』

お父さんの言葉を思い出してしまった。

学校に着き、廊下まで騒々しく響き渡る賑やかな我が教室の戸を開くと、小柄で元気なお馬鹿がショートカットの茶髪を靡かせ抱きついてきた。

「マコちゃん」

可愛らしくてそれでいて良く通る如何にもこの子に似合う声は、

弾みながら私のあだ名を響かせた。

「なあに、メグちゃん」

「宿題、み・せ・て？」

い・や・だ。

と返すのが何時もの日課だったんだけど、今日は機嫌が良かった。
「いいよ」

メグの猫みたいなきりくりの大きな目が更に大きく見開いた。

「なに、なんかあった？ もしかして今日クリスマス？ 大晦日？

「一緒？」

「分かりにくいなあ。盆と正月が一緒になった、かな」

「そう、それ」

「何がそれだ馬鹿者め。取り合えず離してくれないかなあ」

「やだ。好き」

「ああ、はいはい。私も愛してるぞ」

それにしてもこの子は一日一回抱きついて告白しないと気がすまないのかね。周りのクラスメイトから冷かされながら、私は腰にまとわり付いたメグを引きずり自分の席へ向かった。

3・昼

お昼時、メグがピンクのお弁当袋と紅茶のペットボトルを手に私の所にやって来た。机を向かい合わせて毎日の日課のような昼食会が始まる。

「相変わらずマコのお弁当はヘルシーだね」

「そう言うメグのお弁当は相変わらず冷凍食品ばかりだね」

互いのお弁当を突つつきながら私達は他愛もない話をする。昨日のテレビはどうだったとか、あの音楽が良いとか、格好いい先輩があのクラスにいるだとか、小倉先生の頭がどうだとか。本当に人畜無害……。でもないか、まあそんな感じのお喋りだ。こんな何でもない時間が私にはとても嬉しい。私はまだ高校生だったんだと気付かせてくれるから。

でも、高校生らしからぬ話に及んでしまう時もあるわけでした。・
・
・
・

「そう言えば進路調査なんて書いた？」

箸を伸ばす気になれなかった冷凍食品のコロッケをぐくりと飲み干して、メグがそう尋ねてきた。春先の事を何故今更尋ねてくるのか。メグは右脳全開の人だから今更つつこまなかったけど。

「お嫁さん」

爆笑された。何故？

「ゆとりだ。ゆとりがいる」

「お前だつて真つ最中だろうが！」

一頻り笑ったメグはペットボトルに手を伸ばしストレートティーを一気に飲み干すと、男前な顔で私の肩にぽんと手を置いた。

「そもそもその願いはもう叶ってるだろう」

「まあ、ね」

いや、あれは奴隷とも言えなくもない。姉の威厳形無しである。

「新婚旅行は何処がいい？」

「はあ？」

またメグが訳の分からない事を言い出した。テニス焼けした浅黒い顔に今度は無邪気な笑みを浮かべて。小学生の時いたよね。こんな風に笑う可愛い男の子。出る所は出て引つ込んでる所は引つ込んでる腹立つほど立派な大人の身体なのに、そんな風に笑えるなんて素敵だな。でもね、それは当たり前なんだよ。メグの頭の中は小学生のまんまなんだから。

「エンゲージリングはこの際プルタブでもいいよ」

「……私はお嫁に行きたいと言ってるんだが」

私を勝手に男だと脳内変換するな。しかもどうしてお前と私の結婚話に摩り替わってるんだ。メグがそんな事ばかり言うから私達の間には妖しい噂が流れるんだろうが！　って、そんな事言ったとしてもメグは気にしないか。きつと「お互い様だ」と笑うんだろうな。大体だな、私のお弁当のおかずの金平牛蒡をそんな嬉しそうにもぐもぐ味わうなよ。そんな顔で食べられると嬉しくて何も言えないじゃないか。

「でもどうしてお嫁さん？　マコは男嫌いだよな？」

「いや、嫌いつて言うか、触れない……」

「ごによごによ言葉を濁す私の鼻先に箸を突きつけ、それをくると廻しながらメグが嘲笑う。

「男を寄せ付けぬ鉄壁ガード。付いた二つ名『鋼鉄の処女』。いや、カッコイイじゃないっすか」

馬鹿にしてんのかコンチクショ！。そんなの初耳だぞ。それにそれは拷問道具の名前じゃないか。私は箸を置いて、水筒のお茶をコップに注ぎ、

「だからこそ。だからこそそれ乗り越えてくる人が欲しいのだよ」
こぶしを握り締め思わず熱弁を奮ってしまった。ふーん、で済まされましたが。

「実際マコは良いお嫁さんになれると思うよ。頭も良いし、料理上手だし、何時行っても家は綺麗だし。才食兼、美？」

「何故途中で区切る。しかも変な漢字を思い浮かべてるだろう」

才色兼備だ。馬鹿者め。

「顔もツカってるし」

「男装の麗人ってヤツ？ めげるなあ」

肩まであつた髪を「部活の邪魔だ！」とショートへとばつさり切つてしまつて、それでもしつかりと女の子に見える娘は流石に言う事が厳しい。私なんかせめて男に見えないようにと消極的ロングなのに。でも思うんだけど、女装の似合う男、男装の似合う女、どちらがより悲惨なんだろうか。これってやっぱり性癖の問題も絡むんだろうか……。つて、真面目に考えていたら、胸の奥底からアンニュイなため息が漏れていた。

「いやね、私も自分には似合わないなと分かつてるんだけど、気になる人でも作つてデートしたいなあとか、運動部に入つて汗を流したいなあとか、遅くまで遊んだりしてみたいなあとか、そんな風に思つたりもするんですよ」

「おお、青春だ！」

でかい声でそれを言うな。恥ずかしい。

「でもね、それは許されないんですよ……」

私はコップを引つ掴み中身を一気に飲み干すと、ダン！ と机に置いた。

「何ですか？ 私は朔にとって都合の良い主婦なんですか？ 飲まなきゃやつてられませんか！」

「お前は場末の飲み屋のサラリーマンか」

私は肩に掛かつた髪を掴みそれを指先にくるくると巻きつけながら、

「最近私、疲れた女の魅力とか備わつてきてない？」

「うん。生活に疲れたおばはん臭がする」

容赦ねえな、こいつ……。

「物は考え様」

人のお弁当を丸ごと引つ掴み、メグがそう言った。また何を言い

出すつもりだ？ 私は黙って見守る事にした。

「私達もそのうち結婚して家庭に入るんだろうしさ、その為の修行だと思えばいいんだよ。大体私達は女なんですよ。結婚しようが子供が出来ようが生活に疲れようが生理が止まるうが。大切なのはね、どんな時でも女として心に張りを持たなきゃいかんって事よ」

ぽかーんとした。誰が言った言葉だろうと思った。

「訳分かんないけど、君は時々説得力がある事を言うよね」

誇らしげに出っ張った胸を反らし「もっと私を褒め称えたまえ」とメグは高笑いした。

うーん、馬鹿がたまに良い事言うと輝いて見えるよね。馬鹿って得だな。でも取り合えず、一転して物凄い勢いで人のお弁当をかつ食らってるこの馬鹿には、やっぱり『鋼鉄の処女』に恥じないお仕置きが必要だよな。

午後の最初の授業は何時も身が入らない。お腹も膨れて気だるくて、まして寝不足に輪を掛ける春の木漏れ日のような陽射しに頬を撫でる心地いい風。真面目に授業を受けると言う方が奇怪しい。斜め前に座るメグはこくりこくりと船を漕いでいる。多分あれが正解なんだろうけど、小心者の私は申し訳ないやら勿体無いやらでそれが出来ない。だから私は窓の向こうに広がる白ゴマおはぎの群れを見ながらぽーっと思ひ耽るのだった。

『私は朔にとって都合の良い主婦なんですか？』

自分で口走っておいて何だけど、ショックだった。料理も掃除も洗濯も、家計のやり繰りだって、私は楽しみながら家の事の一切合切をこなせていると思っていた。でも本当は不満だらけだったんだ。男の子とデートしてみたい。部活に打ち込んでみたい。メグや皆と

遅くまで遊んでみたい。もっともつと羽を広げて自由にやりたい。それが本音だと私は知ってしまった。

世界には六十五億人も人がいて、そのうち日本にいるのは一億二千万人。そして都会とは比べるまでもなく何も無い、まるで白ゴマおはぎみたいな小さな建物ばかりが目立つこの地方都市には、それでも二十万人もの人々が集い生活をしている。私は気付いたら此処で築いていた。私は近所で評判の妹思いな健気な姉。そして学校では何の面倒も起こさない成績優秀な模範生。でも違う。私は毎日毎日を必死になってこなすのが精一杯だったただけだ。そして今も必死だ。全部、唯一人の為に。

その確率 1 / 6 . 5 0 0 . 0 0 0 . 0 0 0

何故朔は私の妹なんだろうか。

何故私は朔の姉なんだろうか。

何故私でなければならなかったんだろうか。

私でなくても良かったんじゃないだろうか。

だったら、朔が私の妹でなかったらどうなんだろう。私は私のままでいられたらどうか。メグに誘われテニスに明け暮れていたかどうか。いや、そもそもメグと出会えてなかったかもしれない。それどころかグレて高校すら入れなかったかもしれない。

きつと家事なんて何も出来なかったろう。店屋物やコンビニのお弁当ばかり頼って、ぶくぶく醜く太っていたに違いない。家はゴミ屋敷だと近所で評判になってたかどうか。だって私が家事や勉強を頑張っているのは、せめて少しでも朔に姉らしい所を見せたい為なんだから。

その朔が、重い。

私には朔が分からない。

.....

何だ、このメロンコリーな螺旋迷宮は。終わりが無いではないか。

私は「あーあ」と声を上げると、暑さでグロッキーなパグみたいに机に倒れこんだ。

「こら、そこ！」

授業中だというのをすっかり忘れていた。

4・夜

コロッケが好きだ。

姉妹揃って大好きだ。熱々のヤツは特に美味しい。サクサクでほこほこで。正座して手を合わせて、あの金色のお姿を拝みたくなる。「と言うわけで、今晩はコロッケにしよう」

メグのお弁当を見てからそう決めていたんだ。これならあの小姑染みた欠食児童も文句は言うまい。じゃがいもと玉ねぎをカゴに入れ、ツナ缶を探し求めつつ他にめばしい物はないかとまだ人の少ないスーパーの店内をうろついていたら、近所のおば様集団と出くわしてしまった。

「……いや、皆さん、私を我が娘のように可愛がってくれるのはとても嬉しくとても在り難いのですが、コロッケがですね、ここでこうして井戸端会議しているとですね、コロッケがですね……」

コロッケ………。

無駄話、もとい、社会的意見交換をしていたら、血の気が引く程遅い時間になってしまった。慌てて飛んで帰ったら、リビングの真ん中で朔が膝を抱えてテレビドラマの再放送を見ていた。夏の太陽は傾いて目に染みる夕焼けが大きな窓から差し込み、ドラマは正にこれから悲しい終わりを迎えようとしている。朔の小さな背中。そこに落ちる赤い影。悲しいBGM。なんて切ない画なんだろう。その寂しそうな背中、ぎゅっと抱きしめてあげよう。私は静々と朔に近寄った。

「帰るのが遅い！ 早く飯を作れ！」

「はい、すいません」

振り向き様の心臓を射抜く鋭い眼光と声。私は反射的に謝ると、回れ右してすぐさまキッチンに立った。

今でこそ姉に対する敬愛なんて欠片もありやしませんかね、こんな妹にも可愛い時があったんですよ。昔から余り口数は多くなかったし、少々生意気な所はありましたけど、ちよつと失敗して焦がしてしまった料理を美味しいと言つて氣遣つてくれたり、そんな優しい所もあつたんです。日向ぼっこが大好きで、何時も何時も私の後を引つ付いてきて、ぎゅつとしてあげるとお日様の匂いがして、とても幸せそうに笑つて。それが今じゃ……

「不味い。大体じゃがいもに味が染みてないではないか」

鍋奉行ならぬ煮物奉行ですか。コロッケ作る暇がなかったから、じゃがいもと玉ねぎと人参とちくわを万能調味料と醤油で煮込んでみましたが、お気に召しませんでしたか。でもそんな一太刀で斬つて捨てるほど不味いか？ 染みてないか？ 味見したしそんなはずないんだけど。

「ごめんね、作り直そうか？」

「いい」

首を振ると、朔は味噌汁を啜つた。今朝のワカメの味噌汁もどきの味を調べ、それに溶き卵を加えたやつだ。在庫一掃処分だと大量に卵を投入した贅沢な一品は無言でスルーされ、朔の箸は切つて干切つて盛つただけのツナ野菜サラダのきゅうりへと伸びた。

「美味い」

負けた。料理とは言えない代物に負けた。モウナニツクツティイノカワカンネーヨ。

「麻はあれだな。もう少し料理の心を知るべきだな」

その前にお前は姉の苦勞を知れ。

それきり黙々と背筋正しく三角食いする朔。向かいからそれを眺めて食事を取る私。テレビを消して取る何時もの静かな食事風景。うーん、どう考えても私じゃないよな。誰の影響なんだろう。前から氣になつてた事を私は朔に尋ねた。

「朔はそんな言葉使い何処で覚えてくるの？」

私にも伝染つて大変なのですが。

「本だ。歴史小説が主だな」

家には本が山のようにあるのですが、寄りにも寄って姉の私もまだ手を出さない所へ行きましたか。

「お茶」

「はいはい」

なんなんでしょうかね、我が妹は。あれだけ煮物に文句を付けておきながら、小さな口で一口嚙っては渋いお茶をすすり、嬉しそうに「ほう」とため息をついて。反抗期なのかな。でも年齢的に早すぎるしなあ。いやいや、朔に平均的な統計を押し付けるのは間違いだろう。煮物と歴史小説と渋いお茶が好きな小学校三年生なんて世界広しと言えどそうはいない。

「これも六十五億分の一なのかねえ」

朔が不思議そうに小首を傾げた。

夜の帳は降りて、静かな住宅団地に灯る明かりが一件、また一件と消えだすには少し早い頃、私は眠りにつく為の準備を整える。戸締りとガスの元栓の確認をして、一階の電気を全て消して、先に部屋に戻りもう眠りについてるだろう朔を起こさないように気を使い、そろそろと暗がりの階段を上る。自分の部屋の扉を開き、手探りで部屋のスイッチを探すと、味気ないほど殺風景な部屋に明かりが灯った。

普段なら予習復習をしてベッドに入るのだけれど、今晚は違った。私は机に座ると棚に置いた例のノートを取り出し、文字を指で追いながらぶつぶつと呟き朔が昨夜見たものを頭の中に叩き込み始めた。昨夜、朔は悪夢を見た。

そして今夜は私が見る番なのだ。

5・遊び子

子供の頃、海水浴に行った時の事。海の上にぽっかりと顔を出すテトラポットまで浮き輪を着けて泳いでいった。その半ば程で、私は何気なく海の中を覗き込んだのだが、それがまさか夢にまで出てきそうなトラウマになうとは思ひもなかった。まあ、その頃には既に夢を見なくなっていたんだけど。

水中メガネ越しに見た海の中には何も無かった。あつたのは視界の悪い、緑茶けた海水だけ。でもその色は深くなるほどに濃さを増していった。ぽっかりと口を開いて何もかも飲み込んでしまいそうな暗い暗い色が、ゆらゆら揺れる足元に何処までも何処までも続いていた。それを見た瞬間、その場所から逃げ出したくなった。私は立ち上がると、水柱を立たせながら暴走する機関車の如く水面を蹴って陸へ舞い戻った。思いだけは。実際は桜の花びらが舞い散る程の速度で、殆ど半泣きで戻ったんだけど。そしてそれから、二度と海に行こうと言わなくなった。

あの日見た海の中、その続きにいた。

がらんどうの暗闇の中を滑るように落ちていた。瞼の裏を見るような狭く苦しい暗闇じゃなかった。やたらだだっ広くて、方向なんてなかった。在るべき基準が見当たらない。だから上も下も左も右も無い。暗闇に溶けてしまったのか、私の身体は何処にも無かった。不思議だった。こんな救いような無い状況で、どこぞの女子高生の胸のように至極平坦な気分でいられることが。こうして此処に来るのは四度目で、それなりにこの状況に慣れてきたからだろうか。でも思い返すと、初めて此処へ来た時もこんな感じだった。そりゃそうだ。あの日海の中で瞬間的に感じたのは、飲み込まれてしまったら心も身体も冷たく、そして消えてしまっただけで決して戻ってこれない、そんな恐怖だった。けれど此処は違う。私の身体は無い、けれど私は此処に在る。だから感じられる。方向の無い暗闇の中を墮ち

る、そんな矛盾を。それどころか、この暗闇が私自身のような、そうでもないような、どっちなんだよって、この微妙に研ぎ澄まされた感覚さえも。

この闇に好奇心が刺激されないわけじゃない。でもそれ以上に退屈なんだ。だから退屈を紛らす種を拾い集めてしまふ。苺のタルトが美味しそう。でも紅芋アイスも捨てがたい、みたいな。意識があつちこつちに散らばって、何か一つに絞れない。浮かんでは消える思い出達に振り回される。そのうち、辺りの様子は変わり始めていた。

研ぎ澄まされた感覚が見えないものを捉えだしたのか、到る所で暗闇に色が流れ込み始めていた。赤、青、黄、緑、紫……。カラフル？ いや、下品。どれこれもチカチカする原色の色はほとんど暗闇を侵食していく。互いにぶつかり、混じり、でも決して交ざらずに、渦巻きながら地層の断層のような模様を描く。私の中を汚されてしまったみたいで、趣味の悪い服を着せられたみたいで、無性に気分が悪い。

よく見ると、色の一つ一つは蠢いていた。夢だ。この色の一つ一つが夢なのだ。今この時、誰かが見てるだろう夢。空恐ろしい数の夢。なんて混沌として気持ち悪いんだろう。やっぱりここは生理的に受け付けない。人が隠しておきたいことを無理矢理見せ付けられるみたいで虫唾が走る。ちよつとでも覗いてみたいって働くこの気持ち討厭らしい。

余り意識しないようにして、私はもつとずっと奥底、夢のこつた煮シチューの鍋底へと落ちていった。

そのうち、とん、と地に足が付いた。閉じていた目を開くと辺りは一変していた。車一台通れないだろう、曲がりうねる土の道。古びた民家がずっと先まで軒を連ねていた。塀も垣根も何もかもが迫り来るように高い。風は凧ぎ、見上げた空は遙か高く青く丸い。魚眼レンズで覗いた世界。

「朔……………」

私は不安げに、縋るように誰かの名前を呼んだ。答えはない。通りには誰もいない。耳が痛くなる程に静かだ。

道と道が交差する真ん中で、私は見知らぬ町の迷子になって途方に暮れて立ち尽くしていた。

立ち並ぶ平屋造りの家は、貧相な肩を抱き合わせなければ立つていられない恋人達のようなだった。その癖癖も垣根も異様に高い。プライドだけは一丁前だ。等間隔に並ぶ木の電信柱は青空に手を伸ばすアートなモニュメントみたい。櫟は緑濃い葉を茂らせ、桜は薄紅の花を散らし、道端の蒲公英は綿毛を揺らし、向日葵は太陽と大輪の花を比べっこして、それと対照的に水仙は白い影を探し俯いてる。懐古の情さえ感じる在り得ない世界。そして私も。肩で切り揃えた髪、白いワンピースから突き出た生白い手足。足元から伸びる影はやたら細く小さく……、

「真っ白だ」

呟いた途端に、何かが切れた。ガタガタと身体が震えだした。勤めて冷静であろうとしていたんだけど、もう無理なようだった。震える身体を押さえ込もうと抱くのだけど、ちつとも言つことを聞いてくれない。頭の中が霧がかつてる。これは私じゃない。私はこんなに小さくない。何故そう思うのだろうか？ そもそも此処は何処なんでしょう？ いや、何より私は誰なんでしょう？ そんな言葉ばかりが浮かんで邪魔をする。もっと大切なことがあつたはずなのに思い出せない。自分が誰か分からない。私は此処に在る、なのに私が無い。

「朔……」

もう一度、私は誰かの名前を呼んだ。不思議な呪文を唱えたみたいに、霧がかつていた頭の中が急速に晴れていく。

撫菜 麻子

混乱していた頭に自分の名前が浮かび上がる。そうだと気付いた途端に小躍りしそうな程に胸が弾みだした。私は胸一杯に息を吸い込んで大声で訳の分からない言葉を叫ぶと、目印にしている竹林が飛び出た緩やかな坂道の路地に向かって

走る！

叫んで、笑って、はしゃいで、くるくる廻って、今度はジグザグに。丸いポストに抱きついて、青い大きなゴミバケツに飛び乗って足を踏みしめポコポコ鳴らして、直ぐ隣の電信柱に抱きついて身体いっぱい使って揺らしてみても、お気に入りのワンピースが泥だらけになるのも構わず水溜りでバシャバシャ飛び跳ねて。

なんて楽しいんだろう。通りにある何もかもが私の玩具に変わる。目に映るもの全てが新鮮で色鮮やかで驚きで満ちていて。ずっとこのまま遊んでいたい。けれども軒を連ねていた民家が途切れて、変わりに赤茶けた土山が顔を覗かせるようになって、緩やかな坂道は心臓破りの坂へと変貌していた。その頃には私の足取りはすっかり重くて、電池はすっからかんだった。そりゃそうだよ。こんなちっぽけな身体で後先考えず遊んだりするから。

頬を伝い落ちた大粒の汗が乾いた土に染みこんでいく。髪の毛が邪魔だ。肩が重い。心臓が五月蠅い。休みたい。でも私は足を止めない。犬みたいに舌を出してゼイゼイ言いながら坂道を登っていく。知っているんだ。この坂道の先、あの木々が枝葉を伸ばして覆い茂るトンネルの向こうでは、私を待っているんだ。

自分を励まし坂道の頂に立った私。それを待っていたかのように、凪いでいた風が潮風を纏い吹き付けてきた。眼下に広がる壮大な風景は、苦勞した自分へのご褒美と言うには余りにも大きな成果で、私は声を失った。

苔むした石瓦の民家が広がっていた。その先に見える入り江は霞み、浮かび点在する森の島はおぼろげな幻のようだった。遙か続く瑠璃色の海と紺碧の空は、その境界線を何処までも曖昧にしている。空も海もない、上も下もない、何処までも青い丸い世界。

言葉も出ない。思いつかない。そんなもの必要すらなかった。私は頂に立ってただ飽きるほどパノラマを眺めていた。髪を頬を腕を足を、体を触り吹き抜けていく風の愛撫を心地よく受け止めていた。「案外大した事ないじゃん」

泳ぐことも分けなにかもしれない。軽口叩けるならもう十分だろう。疲れてなんかいられない。いや、そもそもなかった。私は何処までも走っていきける。

急勾配の下り坂をブレーキの壊れたジェットコースターのように私は走り出した。何時も勢いが付き過ぎて途中で空回りしてすっころんでゴロゴロ転がるんだけど、

大丈夫。私は無敵だ。

6・おばあ

すっころんで擦り剥いて流れ出した膝小僧の血はすっかり固まってくれたんだけど、脳内鎮静物質はネタ切れを起こしてくれやがりましてどうもありがとうございました。下り坂を駆け走って、広い舗装された道路へ突き当たり、ゴールだと思った途端にズキズキ痛みだしたんだけど、まったく、人の身体は良く出来てる。真向かいの御影石の階段を、足をびよこびよこさせながら上っていった。

歩幅の広い階段を上りきると石畳が真っ直ぐに、古い大きな家へと続いていた。堂々たる構えの家はお屋敷と言った方がしっくりくる。格が違うと言いか、ここに来るまでに見たどの家より立派で、神社やお寺のような凜とした空気さえ感じた。雪が積もったかのような、だだっ広い玄関先に敷き詰められた玉砂利がまたそう思わせるんだろう。背筋が伸びるこういう雰囲気、結構好きだ。石畳の継ぎ目を踏まないように玄関へと向かってゆく。

曇りガラスの入った玄関戸は見た目の重厚感通り重かった。この身体は非力すぎる。苦勞して戸を引くと、私の影がずっと伸びた。屋敷の中はひんやりとして真っ暗だった。浅黒いがっしりとした柱に掛けられた、これまた古く、多分まったく役に立ってない柱時計の音だけが響き渡っている。またあの人は何処かの部屋に引き籠もっているのか。こんな良い天気にも勿体無い。

「おばあ、来たよ！」

丁字の右端の方から立て付けの悪い戸を引く音がした。天井からぶら下がった裸電球にオレンジ色の素朴な明かりが灯り、床板が軋んだ音を立て、それはゆっくりと段々近付いて来る。やがて、上がり框に腰掛けてぶらぶらと足を揺らす私の元にやって来たのは、赤いワンピースを着た女の人だった。おばあだ。

「いらつしゃい、よく来たねえ」

廊下からやって来るまでの足取りと同じ、ゆっくりとした口調だ

った。腰まで届く長い髪を揺らしておばあは床に膝を着くと、私へ手を伸ばして頭皮から額から流れる汗を指先で拭った。

「またいっぱい遊んできたんだねえ。楽しかったかい」

一件怖そうな印象を与えてしまう切れ長の目。でも私を見つめる眼差しは、坂道で見たあの海のように何処までも穏やかで優しい。

私はおばあに見つめられ、触れられるのが嬉しくて「うん」と大きく頷き、

「そしてまたもやってしまいました」

なんでだろう。怪我とか病気とか、見せびらかして言い振り回したくなっちゃうのは。私は足を上げるとおばあに固まりつつある傷口を見せた。おばあは傷口をつんつん突っついて、悲鳴を上げる私を見て笑う。

「大した傷じゃないねえ、舐めとけば治るさ。それよりお風呂沸かしておいたから一緒に入ろう」

「やたー！」

叫んで、私はおばあに向かって両手を伸ばした。おばあに貰ったワンピースは泥だらけだ。おまけに私は汗まみれで汚れ放題。でもおばあはちつとも気にせずに、私を抱き上げ包み込んでくれるんだ。

初めて暗闇に堕ちてあの辻に立ち尽くした時、私は本当に無力な子供だった。ここが何処で私は誰なのか、思い出そうとしても何も思い出せず、だからと言って何か考えて行動を起こすわけでもなく、めそめそ泣くだけの本当に情けない子供だった。すっかり泣き疲れてしまった私は、その場に座り込んでうとうとし始めた。漂うような、飲み込まれるような感覚は久しぶりで、微睡みを楽しみながら重い瞼を閉じようとした。その間に、通りを走ってくる人影を見付けた。

映画のワンシーンを見ているみたいだった。黒く長い艶やかな髪

を靡かせ、女の人が走ってくる。白いワンピースが跳ねて閃いて、カモシカみたいな細くて力強い太腿が顕わになっていた。でもその人はそんなのちっともかまっていなかった。やたら長い手足を動かすその姿は懸命で、感動を売りつけようとする下手な番組より余程引き込まれた。

でも睡魔の方が勝っちゃった。綺麗な女の人。私もあんな風になりたいな。ぼんやりと薄れていく意識の中でそう思いながら私は目を閉じた。

そしたら、ビンタが飛んできた。二発も。

「麻子、こんな所で寝ちゃだめ！」

肩を激しく揺り動かされてすっかり目覚めた私だったが、痛いやらびつくりやらで今度は火が点いたように大声で泣き出した。彼女はそんな私を抱きしめた。柔らかくて優しく、蜜柑の匂いがした。「ああ、ゴメンね。痛かったね。びつくりしたね」

そう謝りながら彼女は、私が泣き止むまで優しく背中をぽんぽんと叩き続けた。

「お姉ちゃん誰？」

声をしゃくらせながらそう尋ねる私に、彼女は涼しげな目を細くして私に答えた。

「お姉ちゃんじゃあないんだよ。おばあだよ」

それがおばあとの出会いだった。

歳は二十代半ばくらいだろうか。夜に浮かぶ青白い月に似た、静かで涼しげな雰囲気漂わせる成熟した艶っぽい大人の女性。それが何故自らおばあと呼ぶのか、私には分からない。でもそんなのどうだっていい。時間が狂ってしまった、みんな何かが何処か奇怪しいこの世界で、私だけでもダメ。おばあだけでもダメ。私とおばあが揃って、初めて正しくこの世界を進められる。その時間を大切にしたい。……。なんか無駄に壮大になってしまった。私は只、おばあのが大好きだって、それだけ。

そのおばあは湯船で私を抱きかかえながら、さっきからずっと頭

を撫で続けてくれていた。私が悪いんだ。脱衣所と言うには余りになだっ広い板の間で服を脱いで、軽快に鳴る曇りガラスの引き戸の向こうを見た瞬間、私の中の手綱が切れた。

溢れ出したお湯は床板を滑るように流れて、私達の足を温かく濡らした。檜の匂いが鼻を擽る。お風呂に居るのに森の中にいるような感じ。壁も床も天井も、暖かな明るい木の板で囲まれていた。何より、段差のない埋め込まれた泳げそうなほど広い木製の浴槽。お湯がなみなみと張られ、開け放たれた窓から差し込む陽射に波打ち煌いていた。

どうもこの身体がいけない。多分そうに違いない。私はまた大声で、文字で表現できない奇声を発すると、浴槽に向かって駆け出しダイブした。が、すぐさま悲鳴を上げて浴槽から這い出た。「染みる………」と片膝を抱え呻く私の視界の隅に、白い足がすつと入り込んできた。ハツとして顔を上げたら、おばあが満面の笑みを浮かべていた。そして私の頭に天罰が落ちた。

ユニットバスしか知らない私には、こんな立派なお風呂はそれこそプールみたいな遊び場になってしまっただけど、おばあにしてみれば毎日当たり前に使う、疲れを癒すお風呂なんだよなあ。迷惑この上ないな、私。おばあは柔らかく大きなシロモノに後頭部をぽんぽん押し付けながら反省になってない反省をする。ふと思うことがあつて、私は下世話にもおばあに尋ねてしまった。

「おばあつてやっぱりお金持ち？」

手を止めて、おばあは天井を仰いだ。

「まあ、無いことは無いねえ」

言い難そうだった。これが金持ちの品って奴か。おばあはきつと国産牛バラと豚コマのパックを両手に悩んだりしないだろうな。

「大きくて立派なお屋敷だもんね」

「必要もないのに大きく見せびらかしてるんじゃないよ。大きくなけりゃならない理由があるのさ」

理由？ なぞなぞか。上は洪水、下は大火事なのか。

「お客様が多いから？」

「お客様ってほど上等な奴らじゃないがねえ。どいつもこいつも大酒飲みで、夢見たいなことばかりふいて、スケベで、その上臭いときてる」

「最悪だ」

おばあは軽やかに笑った。

「そうそれ、最悪。この風呂場だってそうさ。一つ一つ洗濯物を洗ってたんじゃキリがないだろう？ だから全員叩き込んでイモ洗にする為に大きな風呂にしなければならなかったのさ」

随分酷いことを言ってるんだけど、おばあの口調はとても楽しげだった。その人達のことを大事に思ってるんだろう。しかし、湯船に叩き込まれひしめき合う真っ裸の男達？ 阿鼻叫喚の地獄絵図だな。金棒を肩に掛け颯爽と立つ、赤いワンピースを着た鬼までも浮かんできた。

「じゃあさ、おばあがお屋敷に引きこもってるのはその人達が尋ねてくるから？」

一瞬間が空いて、「まあ、そんな所かねえ」と天井を見上げ、おばあは答えた。

「そうか。おばあの肌が白いのはその人達のせいか」

おばあの手を取り、手を重ねる。長くて大きくて力強い、ピアノストミたいな美しい手。この手に触れられるのが嬉しくて仕方ないのは何故だろう。何か秘密があるに違いない。

「そう言うお嬢ちゃんだって白いじゃないか」

「私は外に出て体を動かしてる方が好きだもん」

ぺたぺた触り、しげしげ見つめて、謎の解明を急ぎつつ答えた。
「かけっこかい」

「走るだけじゃないよ。野球でもサッカーでもテニスでも、外での運動ならなんでも好き。疲れるけどね、あの真っ白になっていくのが好き」

さすが金持ち。財運線が太い。こりゃ生粋のギャンブラーだな。

と、おばあの手がすりぬけた。

「そうだねえ」

するぬけた手は、吸い付くように私の頬に張り付いてきた。そのまま、餅でも作るみたいに捏ね繰りまわしだす。

「家の中にずっといたら腐っちまうねえ。お嬢ちゃん、今度お祭りに行こうか」

祭り！？ それに反応して、首を捻り顔を上げた。唇の端を吊り上げた嬉しそうなおばあと目が合う。

「屋台は出るの？」

「もちろん出るさ。神輿も出るし盆踊りもするし、花火も上がるよ」

「天国だ！」

おばあは笑った。

祭り……。綿菓子、りんご飴、カキ氷、クレープ、チョコバナナ……。

7・おやつ

お祭りの予行練習、つてわけでもないんだろうけど、誰が用意したのか、お風呂から上がると汚れたワンピースは浴衣に変わっていた。

こうして風情を偲ばせる雅な物に御目に掛かるのは何時以来だろう。そんな色気の欠片もない女が一人で浴衣を着れるはずもなく、私はおばあに頼んで着付してもらった。浴衣っていいな。糊が利いたひんやりした浴衣は火照った体に気持ち良く、身が引き締まる思いがする。

「完成」

ほんと背中を叩かれ、早速袖の端っこを掴み体をくねらせた。白地に藍色のひぐらしの絵柄は男の子が着るみたい。然もありなん。私に似合うと思って選ばれたに違いない。だったら帯はどんな形をしてるんだろう。まさか粋な感じに仕上がってやしないだろうな。心配になった私は大きく体をくねらせ、目の届かない自分の背後を追いかけるぐる廻りだした。そのうち廻っていることが楽しくなってきた、すっかり本来の目的も忘れてはしゃぐ私は、やがてふらふらになって引っくり返った。歪んで二重になって揺れる天井。危ない危ない。バターになる所だった。

「何してるんだい」

視界の端におばあのだれた顔が覗いた。照れ笑いして、体を起こした。私の脇に佇む、重なつてばやける二人のおばあはすっかり自分の着付けを終えて、やっぱり浴衣を完全に自分の物にしてしまっていた。白地に薄紅色の折鶴の絵柄。帯の位置が高いなあ。浮かび上がる柔らかな丸みを帯びた体の線は艶っぽく、それに輪を掛ける涼しげな目。匂い立つようないい女とはこう言うことか。

私は複雑な気分になった。おばあが綺麗である事は誇らしい。皆に自慢したいくらい。けれど、これは何だろう。ぐちぐちした瘡蓋

を剥がすような、痛いようなこそばゆいような、それでいて何処となく後ろめたいような。そんな気分を誤魔化すように私は言った。

「おばあ綺麗だね。凄く似合ってる」

おばあはにこりと笑う。

「ありがとうねえ。お嬢ちゃんも似合ってるよ。可愛いよ」

可愛いなんて言われるのは久しぶりで照れくさかった。けれど嬉しかった。にやけてしまう顔を見られるのが恥ずかしくて、私はおばあに抱きついた。

「今日は何時にも増して甘えん坊だねえ」

「そんなことない」

おばあは私を抱き上げると、すべすべとした頬を摺り寄せ歩き出した。真っ白く長い首に両手を回し、より一層強くしがみ付いて私は目を閉じる。柔らかな感触を心地よく歓迎しながらも、少し腹立たしい気分だった。

眠りにつくまでの間、青白い月明かりに浮かび上がる私の部屋の輪郭。それを見ながら、思い返していた。この暗闇を怖がるふりをして、母さんの布団に潜り込んだのは何時の頃だったろうか、と。

あの頃の私は本当に素直じゃなくて、何か理由を探さなければ甘えることも出来なかった。あの時のように怖がる必要はない。何か理由を探す必要もない。そんな事しなくても、おばあは私を抱き締めてくれる。でもおばあは如何してそうしてくれるんだろう。こんな何も無い私を可愛がってくれるんだろう？

おばあは何も分かってない。

さっきまで真っ暗だった長い廊下には眩い程の白い光が差し込んでいた。また誰かが先回りして、閉めていた雨戸を開いてくれたらしい。浅黒いがっしりとした柱や真っ白なだけで飾り気のない障子のはっきりと姿を現している。それは長い冬を越えて待ち望んだ春

がやって来たかのような、そんな鮮烈な印象を刻んだ。

光と影、白と黒、質実さと繊細さ。この屋敷は古臭くて静かで、時間が止まってしまったかのように。まるで後ろ髪を引っ掴まれて振り返らずにいられない、ずらりと並べられた美術品を鑑賞しているみたいなんだけど、それだけじゃない。暖かくて親しみ深い何かがここには息づいている。それが何なのか、私は注意深く流れていく屋敷の中に目を凝らした。長い廊下が、おばあの歩調が、恐ろしく短く速く感じる。

「うー」

「どうかしたのかい!？」

鋭い声が飛んだ。胸の底から込み上げてきたくぐもった唸り声に、おばあは足を止めて過剰な反応を示した。眠ろうとしていた私を引っ叩いて起こした時みたいに。

「あー……、遊び過ぎて疲れたかなー」

笑って誤魔化す私をおばあは強く抱きすくめた。甘くて酸っぱい胸がすく匂いに頭の芯が軽く痺れた。

と、思考回路に閃光が走った。

臭いだ。この屋敷に染み付いた臭い。生活臭。どうりで暖かくて親しみ深いわけだ。当たり前だけど、当たり前すぎて気付かなかった。どんなに立派な屋敷だろうと、ここは人が暮らす家なんだ。臭いが染み付く程の年月を、人と共に在り続けた家。そしてこれから、おばあの為に在り続ける家。

そう気付いたら、辻に立ち尽くした時のような途方に暮れた気分になった。さつきから私は何なのだろう。ちょっとセンチになりたいうお年頃なのか？　そうやって自分を笑ってみたけど、付き纏う不安は収まらなかった。私は縋るようにおばあを見た。おばあは何かに見とれていた。すっきりとした鼻から顎、首までのライン。綺麗な横顔だった。おばあの眩しげに細くした目に釣られて、私も外へと顔を向けた。玉砂利の庭の向こうには家が立ち並び、私がついて来た道が山の頂まで続いていた。まるで万里の長城でも越えてきた

かのような万感の思いが込み上げてくる。ちよつとオーバーだな。でも私を褒め称えるみたいに、山の頂には大きな入道雲が湧き上がっていた。

「凄いね」

「八雲立つ、だねえ」

十重二十重に湧き立つ雲。それを見ていたら、急に胃袋が恋しく鳴った。

「ソフトクリーム食べたい」

私の顔を覗きこんで、おばあは顔をくしゃくしゃにして、大声で笑った。

「残念。ソフトクリームは用意してなかったねえ」

おばあはそう言うのと廊下を横切り、障子に手を掛けて開いた。真先に緑の庭と真つ青な海、真つ白い雲が目飛び込んできた。それから陽射と共に畳の上を滑るように伸びる軒の影が目がいった。波のざわめきと風の囁きだけが響く、黒塗りのちゃぶ台一つだけが置かれた殺風景な床の間。でもここには、おばあを取り巻く全てが在る。

まただ。またこれだ。どうしてしまったんだろう、私。どうしてこんなに不安なんだろう。どうしてそんな事を思っただろう。私が消えてしまっただなんて。あの坂の頂で私は見たじゃないか。この海も空も町も。前も、その前も、私はこの部屋でこの景色を見たじゃないか。あの時と何も変わらないじゃないか。なのにどうしてこんなに……。

「さあ」

おばあがゆつくりと腰を落とし、私を畳の上に下ろした。地に足が付いて、私は益々不安になった。何もかも皆、見上げる程の高さ。私はこんなにも小さい。どうして私はこんなに小さいんだろう。こんなんじゃ、私は何も出来ない。

おばあの手が肩に触れた。びつくりして、私はおばあを見上げた。不思議そうな顔でおばあは尋ねた。

「どうしたんだい、さっきから元気がないねえ」

「そんなことないよ！」

わざと大きな声を張り上げ、私はちゃぶ台の前に座った。目の前には汗を掻いた琥珀色したコップとおやつが用意されていた。

「いただきます」と両手を合わせる私。

「召し上がれ」とおばあ。

さっきまでグーグー鳴ってたお腹は何処へやら。食欲がまるでなかった。胸の奥底に沈殿するヘドロみたいなものが迫り上がり張り付いてくる。再び奥底に沈めようと、私はコップを手にして一口啜った。

口から喉へ、喉から胃へ、胃から全身へ。冷たい麦茶はあつと言う間に染み渡っていった。一口啜って気付いた。ヘドロどころか、私は砂のように乾ききっていたんだなと。食欲がまた戻ってきた。私はおやつを手にして、一口かじった。

「美味しい」

啞然として私は呟き、また一口かじった。凄いなと思った。サクサクもちもちジューシー。パンの耳を揚げて砂糖をまぶした、ただそれだけの物。なのにこんなにも美味しく、優しい。口に広がる甘い味に、私は救われたような気がした。

「美味しそうだねえ。おばあにも分けておくれよ」

すっと伸びてきた手を、私はペンと弾いた。

「ダメ」

「いいじゃないか、減るもんじゃあるまいし」

「減るよ。思いつきり減るよ」

「ケチ」

「ケチで結構」

誰がやるもんか。

8・暗黙

多分、パンくずが散らばった皿の上に残された三切れのおやつは、すっかり冷えて不味くなってる。こんなことならおばあと仲良く半分こすればよかった。出来ることならティッシュに包み懷に入れて持ち帰って、ホットミルクに浸して美味しくいただきたいけれど。性分なのか意地汚いだけなのか、それが目に入ると気になって仕方ないから、おばあに膝枕をしてもらいながら、ぼーっと庭先を眺めていた。

庭は鮮やかな青い芝生が広がっていた。蜜柑の木はたわわに実った果実で枝を撓らせている。夏なのか秋なのか冬なのか、それとも春なんだか。陽射は穏やかな昼下がりを運んでくる。ここに朔がいたらどれ程喜ぶだろう。夏の西日はじりじりと肌を焦がすから、最近ではリビングで丸まって微睡む姿を見なくなってしまった。

朔、今頃何してるかな。

久しく帰っていない故郷を思うような望郷の念にかられた。時間が迫ってきている。夕暮れ、蝉時雨の止んだ夏の終わりのような物悲しさが私を包んだ。

私はおばあに話しかけた。

「おばあは何時も肝心なことを聞こうとしないよね」

「肝心なこと？」

「朔のこと」

ああ、と思い出したようにおばあは呟いた。惚けてるんだろうか。良く分からない。

「私がここに居るってことは、朔がまた悪夢を見たってこと。おばあはその夢を知りたいんでしょう？ どうして聞こうとしないの？」
少し責めるような口調になってしまった。「ごめんなさい」
「そうやって謝るくらいならもっと考えて話せばいいのに。」

「何を謝るんだい」

気にしてないよ、そう付け足すようにおばあの手が髪を撫でる。

おばあは優しい。その優しさが益々私を不安にさせる。

「本当はね、話したくて仕方ないんだ。朔のこと、一人で胸の中を抱えてるには辛いから。友達に全部話してしまおうと考えたこともある。けれど話せなかった。何か奇怪なことになり込んでしまっている。何時かおばあに迷惑をかけてしまっているんじゃないのか、そうしてる。いつかおばあに迷惑をかけてしまっているんじゃないのか、そう思いながらも、おばあに優しさに甘えてる。だから、ごめんなさい」

言葉を吐き出す程に痛みが突き刺さる。痛くて、申し訳なくて、もうおばあを顔を見れない。そんな私の前に、ひょいとおばあが覗きこんできた。

「取るに足りないねえ。そんな顔して謝るには」

おばあは目を細めて笑った。

「それに、おばあはお嬢ちゃんに甘えられるのが嬉しいんだけどねえ」

「おばあ……」

「話してくれるね、おちびちゃんの見た夢のこと」

「ごめんなさい、と私はまたおばあにそう謝った。」

一年生の頃、伝言ゲームをしたことがある。やろうと言いだしたのはメグと私だったんだけど、皆も何だかんだとノリが良いのでクラス全員を巻き込んでしまった。『ジョンは犬と散歩に出かけた』。英語の教科書から適当に引っ張り出したなんでもない言葉は何故か、『小倉先生の帽子を取ったら丸い皿が乗っていた』に代わっていた。悪ふざけの切っ掛けを作ったのはおそらく、クラス一の愛すべきお馬鹿の仕業だろう。

しかしそれさえも伝言ゲームなのだ。情報は人の手を離れるほどに本来の価値を失っていく。私は腐心した。ただ在るがままに、朔

の訴える悪夢をノートへ刻んでいくことを。それは偏に、ここでこうしておばあに伝えるために。

そうだと、思いたい。

「また奇想天外な話だねえ」

私の口から語られる朔の悪夢。その間中、おばあはただ黙って海を見つめ続けていた。話を終えてもしばらくそんな風だった。そうしてようやく、おばあにしては控えめな表現を零した。

「支離滅裂とも言っね」

そもそも話になっていない。漫画でも小説でも写真集でもいい。ありとあらゆる本を集め、無作為に一ページだけを千切って、それを並べていったら一体どんな物語になるだろう。二種類のパズルのピースをごちゃ混ぜにして、それを無理矢理繋げていったら一体どんな絵が仕上がるだろう。朔が見る悪夢はそれと同じ。意味の繋がらない夢が幾重にも重なり、最後に、劇の終わりを告げる緞帳が降りるかのように、真っ暗になる。

「おばあはこの夢をどう思う？ 怖いと思う？」

「ああ、怖いねえ」

朔の独特の目を思い出しながら、私は「そう」と呟いた。

私が求めるのは絶対的な服従。まるでそんな苛烈な意思が宿るかのような、あの海に似た吸い込まれそうな深い瞳の色。誰かに媚びることなど許さない、上目遣いに睨みつける三白眼。その目がリスのような小さな身体をどれ程大きく見せることか。そしてその目が語る通り、例えば自分が間違っただけのようにもそう易々と折れたりしない、そんな意固地な頑固者が、泣きながらしがみつき震えるほどに怖がる夢。こんなものが？ 朔も意外に可愛い所があるんだな、と最初聞いた時は拍子抜けだった。けれど今は違う。怖い。何が言われても答えようもないのだが、薄気味悪いと言っにはもつと明確な、気配と言っにはもつと実体の籠った、霧よりももつと濃く渦巻くような、そんな暗い何か。

でもそれだけじゃないんだ。この夢は鏡のように私に跳ね返る。

私が一番怖いのは、私。鼻歌まじりにノートに悪夢を刻み込んでいる時、私はどんな顔をしているのだろう。夢を舐めるように貪り喰いながら、笑っているんじゃないのか。喜びに満ち溢れて。

「心配だねえ」

誰のことを心配と言うのだろうか。過剰なほどに私の心が反応した。瘡蓋だ。またあの感覚が蘇った。そういうことかと理解したら、私の心は鬱蒼と茂る森の住人になっていた。

「私って嫌な女」

はあ？ おばあは間抜けな声を上げ、ぷつと吹出した。

「ちょこつと傷ついた」まあ、こんな形じゃ仕方ないけど。

「ああ、ごめんよ。でもどうしてそんなことを？」

うん、と力ない返事をして、私はおばあから目を逸らした。

「テレビドラマでね、凄く嫌な女の子がいるの。とても綺麗な女の子で、何時も男の子にちやほやされてて、でも物凄く性格が悪くて、絶対にヒロインにならない女の子。その子は主人公の男の子と付き合ってたんだけど、飽きてしまつてこつ酷くふるの。『私は彼方のことなんて直ぐに忘れてしまうけど、彼方は私のことをずっと覚えていて』って。私はその子にそっくり」

逸らした目はまたおばあへと戻った。何も言わず、ただじつと見つめてくるおばあに私は精一杯手を伸ばす。けれど、その手は小さすぎて虚しく空を掴んだ。

「おばあのが好き。優しくて強くて綺麗でお金持ちで、私が欲しいものを全部持つてる、そんな眩しいおばあが好き。誰にも渡したくない。ずっと私だけのおばあであつて欲しい」

おばあは柔らかく私の手を包み込んでくれた。けれど、私は首を振る。

「でもおばあだけじゃないの。メグにも朔にも、ううん、誰にでも私は誰かの一番でありたい。誰かにとつての特別でありたい。でも私はからっぽで、何も返せない。私は無力で、その癖我がままで、嫌な女だ」

言っんじゃないかった。後悔が込み上げた。怖かった。おばあに嫌われてしまったらどうしよう。嫌われてしまったら、私はもう此処にはいられない。それどころかこの瞬間にさえきつと消えてしまう。考えれば考えるほど後悔は込み上げ、視界はぼやけた。

「馬鹿な子だねえ。自分のことを嫌な女だなんて言うもんじゃないよ」

おばあは指先を頬から目元へとなぞりながら私を諭した。

「だって馬鹿だもん」

一応自覚してるんだねえ。何気にやんわりきついことを言っておばあはくすりと笑った。

「卵が先か雌鳥が先か」

？

「お嬢ちゃんを好きな人達はお嬢ちゃんに何かを求めたりしたかねえ。お嬢ちゃんはお嬢ちゃんを好いていてくれる人達に何かを求めたりしたのかねえ。そうじゃないんじゃないかい？ お嬢ちゃんがお嬢ちゃんを好きな人達に何かしたいと思うのと同じように、お嬢ちゃんが好きな人達はお嬢ちゃんに何かをしてくれるんじゃないのかねえ。そういう思いが連なり輪になって、どっちが先でどっちが後だったか分からなくなってる、ただそれだけのことだと思っがねえ」

・・・こんがらがってきた。

「もしかしてわざと言ってる？」

「何がだい？」

悪戯っ子みたいにおばあは笑った。

「何時の世も我がままは女の常さ。そしてそれを許してくれる男だけが花を掴むのさ。まあこれは違う話だけだねえ、ようはそれくらい気にする必要はないってことさ。それより、人の為になにかをしてあげたい、その心を大切にすればいいのさ」

大切にすってなんだろう。胸の中でただ暖めておけば良いってことなんだろうか。だったら、形にするには容易くなく、言葉にす

れば白けてしまいそうなの思いは、どうすれば伝えられるんだろう。私には分からない。

「私はおばあに何が出来る？ 何をしたらいいの？ おばあは何をして欲しい？」

なにも、とおばあは首を竦めた。やっぱり私が小さすぎるからだ。だからおばあは私が何も出来ないと思ってるんだ。

「違うのおばあ。本当はこんなじゃない。本当の私はもっと、不意に人差し指が唇に触れた。おばあは首を振った。寂しそうに、悲しそうに微笑んで。

「…………ごめんなさい」

何時だっておばあは正しい。何時だっておばあは間違わない。何時だって間違うのは私。何も分かってないのも私。

すっかり冷えて不味くなってしまったおかしを、私は黙ってじっと見つめ続けていた。

8・暗黙（後書き）

大修正をかましてしまいました。どうもすいません。これからある程度書き溜めてUPします。それではまた来月に。

9・インスピレーション

目が覚めたら見慣れた部屋にいた。机と本棚とベッド、仕事部屋みたいな華も色気もない私の部屋に。

丁度目覚ましが鳴った。もそもそとベッドから身体を起こして時計を止めると、先日磨き上げたばかりのフローリングの床に素足を下ろした。冷たい感触が心地いい。パジャマの裾をまくり膝小僧の擦り傷を探したけれど、痕跡すらもなかった。

「そりやそうだよな」

でも夢じゃない。この足に伝わる冷たさと同じ。あれは余りに現実味がありすぎる。そもそも、私は夢を見ない。

略夢。夢を見ない私が見る、夢のような、けれども夢じゃない何か。一々そう呼ぶのは長つたらしいから、略夢。朔が悪夢を見た明くる夜、必ずといっていいほど墮ちるそれが一体何であるのか、歳の離れた妹に右往左往させられる情けない私に分かるはずもない。ないんだけど、ただひたすら居心地のいい場所なのは確か。目を覚ます度に涙と鼻水でぐずぐずになっているのが玉に瑕だけけれど。

恋しいのかもしれない。

部屋を出て顔を洗い、冷蔵庫の中身と睨めっこして朝食とお弁当のおかずを作っていたら、ふとそんなことを思った。背後のリビングに置かれたテレビからは朝のニュースが流れていて、陰惨な事件ばかり読み上げられている。世を覆う灰色の雲のなんと暗く厚いことか。せつかく空気の澄んだ爽やかな朝なのに、水面に口を突き出してパクパクさせている酸欠寸前の金魚にでもなったかのような気分させられる。クリック一つで女の子の身体の構造から爆弾の作り方で、いとも簡単に分かるようになったけれど、宇宙に飛び出して星を駆け巡る未来予想図にはまだ程遠く、なのに人口も資源も科学も経済も頭打ちで、未来は先行き不透明。

お弁当の端に添えようと、まだ湯気のたつブロッコリーを摘む手

をぴたりと止めた。なんでまた私はお弁当に彩り良くおかずを飾っていくという楽しい作業中に、コラムニストにでもなったかのように世情を嘆いているのでしょうか？

「あちっ」

取り落としたブロッコリーを床から拾い上げて水で洗っていたら、階段から軽い足音が聞こえてきた。なんか色々と面倒になってしまったので、ブロッコリーを口に放り込んだ。しゃくしゃくと甘く青臭い味を楽しみながら食器洗浄機から茶碗を取り出し、テーブルに並べはじめたら、リビングにふらりと朔がやって来た。

「おはよう」

「よー」

それなんて掛け声？ だらりと上げた手はがっくりと手首が曲がっていた。髪はボサボサで、目はとろんと虚ろ、口は半開き。朝に弱い朔だけど、こりやまた輪を掛けて酷い。

「先に顔洗ってきたら？」

「いい。ご飯を食べてから顔を洗って歯を磨いた方が合理的だもん」
「だもん？ 聞かなかったことにしよう。合理的？ それはずぼらと言っんです。多分、まだ味わっていたいんだろっな。微睡みの時を。」

テーブルに朝ごはんを並べる。何時も通り二人きりの朝ごはん。じゃがいもと玉ねぎの味噌汁を啜り、それから醤油に手を伸ばして思った。何であれ、救いがあるってのは良いことだなと。例えばほら、向かいに座る何時もは小憎らしい女の子。頭はふらふらふらと、今でも何処か夢心地。醤油もかけずに冷奴に箸を伸ばし、摘まんで口に運んだ途端、弾けたように零れる笑顔なんてのも……

「おい、そんなに醤油をかけるな。豆腐が死ぬだろう」
「死なないよ、豆腐なんだから。」

自転車に乗って何時も通り堤防沿いの道を辿る。桜並木の向こうの空は青く、陽射は穏やか。カーキエックのスカートに悪戯する風と戯れながら学校へと向かう。昨日と同じ朝を繰り返しているような錯覚。勿論そんなはずはなくて、茶色く濁っていた川も今朝にはすっかり元に戻り、水面はきらきらと輝いていた。昨日よりもずっと完璧な朝。なのに、今度は私が違う。制服が可愛すぎて私には似合わないじゃないか、なんて訳の分からないことで八つ当たりしている。

略夢から帰る間際、おばあが一つ困った頼み事をしてきた。

海と山と町と庭と。全てが手に取るように見渡せるあの部屋。その続きの間から私は帰るのだけれど、襖を開いた先の眩しい程の光に足を踏み入れる前におばあは言った。

「例のノートを持ってきておくれ」と。

まったく、私は何にを考えていたんだろう。いや、ただそうやって頼まれたことに大喜びで、結局は何も考えてなかったんだけど。「分かった」と一つ返事で引き受けて、そして今更になって気付いたわけだ。どうしたらあの世界に物を持ち込むことが出来るんだ？と。

略夢がなんであるのか。夢じゃない、かと言って現実でもない。

私がかかっているのはそれだけ。正体不明のそんな所に物を持ち込むなんて出来るんだろうか。そもそも、私に「なにも」と言ったおばあがどうしてそんな頼み事をしたんだろう。あのノートはそんなに必要な物なんだろうか。

スカートを手で押さえ、かくりかくりと首を傾げて自転車を漕ぐ私はさぞ気味悪かったろう。気付いたら何時の間にか学校の校門を通り抜け、我がクラスの戸を引いていた。すると、お馬鹿と目があつた。

「おはようマコ愛してる宿題見せて」

ネコ缶開けたらまっしぐら。メグが跳ねるように突進してきた。毎度毎度朝っぱらからよく飽きもせず愛の無いの告白をしてくる

もんだ。宿題が懸かつてるだけに必死なものも分かるんだけど、分けるだけに心にちっとも響かない、と言うかムカツク。構うのがどうにも鬱陶しくてひらりと避けたら、勢いが付き過ぎたお調子者はそのまま床と激突しそうになった。慌てて抱きとめたら、社交ダンスの決めポーズみたいになっちゃった。皆から冷やかしと拍手を頂く程の。

「なに、今日のマコとっても大胆」

「頬を染めるな気持ち悪い」

メグはくりくりした大きな目を細めた。訝しげな顔で私に尋ねる。

「マコ、もしかしてなんかあった？」

「え、どうしてそう思うの？」

ドキツとした。尋ね返したら、メグは首を傾げて、

「うーん、何となく」

「何となくで人の内側を浚うのは止めてくれ」

「当てずっぱ当てずっぱ！」

それにしては恐ろしい程的中率を誇るのだから困る。しかも自覚してないのだから始末が悪い。

小柄で可愛らしくてちよつとHな体で、おまけにちよつと頭が足らなそう。軽薄な男達に何かと腹の立つ勘違いをされやすいメグ。けれどそれは大間違い。この子に嘘や見栄は通用しない。驚くほど人や物の本質をしっかりと捉えている。私は見た。彼女に言い寄ったそんな男達の末路を。端的に、ぐつさりと、再起不能に。死屍累々。恐ろしい、ああ恐ろしい、恐ろしい。実はメグの額には人の心さえも見通す千里眼があったとしても、私はちっとも驚かない。

もつとも、それを上手く使いこなせるかどうかは別の話だけれど。「なに、この頭を撫でる手は。なんか凄く馬鹿にされてる気がするんですけど」

言葉と表情がまるで合っていない。私はもう、あんたのそういう所が堪らない。

千里眼ねえ．．．．．

「ねえ、メグ」

「なあに？」

「この学校に才力研つてあつたよね」

ゴロゴロ言う猫みたいなメグの顔が見る見る変わっていった。まるでカルピスの原液でも一気飲みさせられたみたいな顔へと。ま

10・墓場とオカ研とその主

つがえた矢は放たれる為にある。軋むほどに引き絞られた弦から放たれる矢は、風を切つ裂きの射抜く。その矢が例え自分を射抜く凶器に変わったとしても、一度手から放たれた矢は決して戻らない。じゃあその愚を犯さない為にはどうすればいい？ 簡単だ。矢をつがえなればいい。ただそれだけの事。

「どつたの、弓道場なんかぼーっと眺めて」

脇からひよいと顔を出してメグがそう尋ねてきた。

「後悔のない生き方って案外つまんないのかなあ、なんて思っちゃったりなんちゃったりして」

「はあ？」

黄昏てみたかったです。スイマセン。

放課後、校舎と二階建てのプレハブ小屋を結ぶ渡り廊下を、私とメグは歩いていった。五階建ての鉄筋コンクリートの建物が七つだったか八つだったかある我が学校にしては珍しい木造の廊下で、壁はなく剥き出しの地面にはスノコが敷かれていた。グラウンドから吹き抜ける風は砂を纏う。板の上を歩く度にじやりじやりと小気味良い音が鳴った。

「なんか本当に扱い方がどうでもいいって感じだね」

「実際どうでもいいよあんな所」

知り合いだろうか。ランニングをしている野球部の男子達に手を振り返しながら、メグはバツサリとそう斬り捨てた。あんな所。私は追いやられたようにフェンス際に建つプレハブ小屋を眺めた。建物は殆どが校舎の影に隠れ薄暗く、今にも倒れそうだった。壁に張られた補強の大きなブレスが役に立ってるように見えない。学校からも生徒達からも相手にされず、それでも懸命に活動が続ける弱小部が集う、通称『墓場』と呼ばれている所。なんて酷い言われようだと思っていたけれど、そんな雰囲気十分醸し出している。

「ねえマコ、やっぱり行くの辞めない？」

メグは振り返ると、今更になってそんな事を言い出した。目的のオカルト研究部はもう目の前だっていうのに。しかも朝から何回も何回も同じ台詞を繰り返しているんだから、いい加減呆れてしまう。

「だ・か・ら、一人で行くからメグは部活に出ろってば」

「だ・か・ら、そういう訳にはいかないんだってば。だってあいつは変態だよ？ マコが一人で行ったら何されるかわかんないよ」

変態ねえ。他ならぬメグがそう言うのなら、間違いないくそいつはご愁傷様な変態なんだろうけど、どうもメグの態度が気に懸かる。突っ慥貪と言うか。口ぶりや、わざわざ休み時間を潰して渡りを着けてきた辺り、知り合いなのは間違いないようなんだけど、過去にその変態と何かあったんだろうか。

「もしかして朔になんかあった？」

聞こうとしたら先に聞かれてしまった。そして結構痛い所を突いてくる。

「どうしてそう思うの？」

「だって人見知りで小心者のマコが暴走する時は、何時も朔になんかあった時じゃない」

「ああ、なるほどな」

弁明のしようもないほど心当たりがあるのが困る。だったら、私は今暴走してるんだろうか？ 家事に育児に略夢に悪夢、その上期末テストは目の前で、これ以上何かを抱え込む余裕はなかった。特に今回は赤点は持つての外だし。もっとも、そんなボーダーは何時も余裕でクリアしているんだけど、私は石橋を叩いて誰かに渡らせるくちだ。つまり万全を期して望みたい。だから略夢に物を持っていく方法を誰かに調べてもらおうと思ったんだけど……。やっぱり安易すぎるだろうか。大体どうやって説明したらいいんだろう。誰かに話してもいいものなんだろうか。結構なんにも考えてないな、私。

「おーい」

「んあ？」

「だから朔になんかあったの？」

「違う違う。あったのは私」

メグの大きな目がきらきらと輝きだした。

「なに、そんな事件！？」

始まった。最近大人しいなと思っていたら、形を潜めていただけだったか。

「君は相変わらず何でも事件に仕立てたいらしいね」

「失礼なこと言うな。私が事件に仕立ててるんじゃない。事件が私に仕立ててるんだ」

「意味が分かん」

「ようは美少女には事件がよく似合っつてことだよ」

「退屈なんですよ、ようは……」

この物騒な考え方、どうにかならんものか。

私はメグを冷たくあしらいながらも、実はメグの首に見えない鎖を掛けて引きずり回していたのかもしれない。もしくは目の前にメグが如何にも好きそうな煮干を吊り下げて、そうやって保険を掛けていたのかもしれない。勿論そんなつもりはさらさら無かったんだけど、もしそうだったとしたら、そうしておいて良かったな、とブレハブ小屋に一步足を踏み入れて思った。中は暗く埃っぽくて、やたら静かで、どうにも薄気味悪かったからだ。この上「変態」の二文字が付き纏うんだから、一人でここに来ていたらきつと引き返していただろう。

「こつち」

腕を引っ張りメグは私を促すと、一足早く入り口側の錆びた鉄階段を軽快な音を立てて上りだした。迷いない足取りは奥へ奥へと向かっていく。私はその後を黙って付いて行く。幾つかの部屋の前を

通り過ぎ、一番奥隅の部屋の前でメグは足を止めると、チツと舌打ちを零した。

「あいつ、部員なんかいらないうて言ってたのに」

引き戸にはえらく達筆な字で『部員募集』と書かれた張り紙がしてあった。この人気のない小屋を見れば張り紙の効果の程が窺い知れる。ノックのつもりか、メグは戸に軽く蹴りを入れ、それから三秒も待たずに勢い良く戸を引いた。

「なんだここ」

裏切られたと思った。墓場とオカ研、ベストマッチの組み合わせ。おまけにその主は変態ときてる。そりゃ部屋の中は怪しさ満点で、いつそ乾杯してやりたいくらいドロドロのぐっちゃぐちな所だと思っていたのに、六畳程の長細い部屋は小奇麗に片付いたモデルルームのようだった。

床は灰色の毛並みの長い絨毯が敷かれていて、緑と黄色の縞模様のカーテンが揺れる窓際には、籐で出来た高価そうな応接セットが備えられていた。部屋の奥隅にはスチールの本棚が二つ、それぞれ向かい合わせに並んでいる。その合間にはすっぽりと白いシーツが敷かれた小さなベッドが埋まっていた。そしてその上には、長い足を器用に折りたたんだ男の子が読みかけの本を胸に抱いて眠りこけていた。

づかづかとメグは土足のまま部屋に上がり込んだ。男の子の前に立つと、「起きろ」と低い声で唸り、またも乱暴にベッド蹴りを入れる。ドスツ、と柔らかい物がめり込むような音がした。男の子は穏やかな笑みを浮かべたままぴくりともしない。気持ち良さそうに寝息を立てている。

「起きろってば！」

メグは耳元でそう怒鳴った。胸の上で規則正しく上下していた本がぴたりと止まった。男の子は長い呻き声を出しながらゆっくりと身体を起こした。

「やあ、おはよう愛琉」

「おはよう。あんた、どうして私達がここに居るか分かってる？」

「私達？」

眠たげな横顔がすつ、と入り口で立ち尽くす私に向いた。男の子は一瞬固まって、それから私に軽く頭を下げた。「どうも」と、私も頭を下げ返した。男の子はメグに向き直り、寝癖の付いたぼさぼさの髪を掻きながら呟いた。

「なんだっけ？」

「お前なあ！」

掴み掛からんばかりの勢いでメグが怒鳴り散らした。男の子は欠伸を一つすると、

「うそうそ。ちゃんと覚えてるってば」

と、涼しい程の笑顔でメグの腰の辺りをポンポンと叩いた。

私は二人のやり取りを黙って見つめていた。息を殺し、空気のように限りなく透明になることに勤めながら。そうしなければ二人の邪魔をしてしまいそうで。私の知らないメグと私の知らない男の子。どうにも居心地が悪いなと思っていた。

11・トリオ

なんとなく面白くない。

東方愛琉。彼女と出会ってから一年余り。私は誰より側でメグを見てきた。授業中は寝てる、宿題はやってこない、テストは赤点だらけ、なのになんとも堪えない。挙句に教室の真ん中で男の子達と大声で口にするには憚られる話題で一緒になって盛り上がるし。だからといってがさつでもなくて、しっかり女の子らしい所も押さえてる。彼女はちょっとずるい。

何も隠さない何も着飾らない。誰にだってどんな時だって在りのままで居続けられる、そんな彼女だから、私はメグのことだったら何でも知っていると、何処かでそう思っていたのかもしれない。けれど私の前には、今まで見たことのないメグがいた。テニスをしている時の怖いほど真剣な姿への変わり様とも又違った。物に当たり、眉を吊り上げ大声で怒鳴る、そんなの今まで見せてくれたことがない。余程嫌いなんだろうか。へらへら笑いながらのらりくらりとかわす、細い身体をしたトコロテンみたい彼が。ううん、違う。メグは嫌いなものには道端に転がる空き缶程度の扱いしかない。……うーん、どうやら私は弄ばれてしまったらしい。

「愛琉」

彼は突然立ち上がると、食って掛かるメグの肩に手をかけた。笑顔は消えていた。メグの名を呼んだそれには、真剣で何処か甘ったるい響きが籠っていた。メグは黙って彼の顔を見上げていた。濃厚なラブシーンでも始まりそうな雰囲気ドキドキしていたら、彼はそのままメグの傍らを通り過ぎ、私の所へ歩み寄ってきた。

大きい。少したじろいってしまった。私より大きい男の子なんてざらににいるけれど、意外だったのだ。線が細くて小さそうな印象があったから。私の目線より少し上に、細いハの字の目。まだ寝ぼけているのかと思ったらこれが何時もの彼のようだ。

「初めまして、かな。兼巻 司です」

彼、兼巻君はにこりと笑いながら右手を差し出してきた。自己紹介で握手を求めてくる奴なんて初めてみた。でも悪い気はしない。私も自分の名前を名乗ると、彼の手に手を合わせた。その途端、この世の終わりを叫ぶような悲鳴が上がった。

「マコが男の手握ってる……」

あ。

すっかり忘れてた。あんまり自然に手が差し出されたから思わず握ってしまった。そう言えば私は男の子に触れないんだった。触ると鳥肌が立って足元からぐらぐらになるから。でも、なんとも無い気分も悪くない。まさか治ったんだろうか。兼巻君の手をべたべた触りながら考え込んでいたら、横から手を払われ、思いつきり腕を引っ張られた。

「これは私んだ！」

腕にしがみつき、メグは兼巻君を睨みつけてそう叫んだ。いや、私はどちらの物にもなった覚えはないんだけど。

「噂通り仲が良いんだね」

くすりと笑い、兼巻君は少し痛そうに手を振って歩き出した。二脚あるゆつたりとした椅子の一つに深々と腰掛け、私に向かって「どうぞ」と席を薦める。

「噂？」と、私も椅子に腰掛け尋ねた。

「君達は有名人ってこと」

そりやお耳汚しを。又候どうせろくな噂じゃないな。しかし二人から生徒がいるこの学校で有名人ってなんだそれ。メグはまだ分かるけど、私は何も無茶した覚えなんか

「って、なんで私の上に座ってる」

さも当たり前のように私の膝の上にメグがいた。「私の座る椅子がないから」と、首に両手を回し甘えてくる。気持ち悪い。「壁の花にでもなってるやいいだろうが」と押しのけていたら、兼巻君が立ち上がった。

「じゃあ愛琉はここ座りなよ」

そういう問題じゃない。頭くらくらししてきた。

「いいから兼巻君はそこに座ってて。メグ、空気読め。出てけ」

「なに、そんなに私が邪魔なの！？ そんなにそいつと二人きりになりたいの！？ 私じゃダメなの！？」

メグは涙ぐむ振りをして、よよとした垂れ掛かった。

「五月蠅い！ それはこっちの台詞だ。この浮気者め！」

「違うわ！ それは誤解よ！」

「なんか僕お邪魔みたいだから席外そうか？」

……なにこのコント。私、乗せられた？

「分かった、分かったよ。私が悪かった。全面的に譲歩する」

確かに私はそう言った。言わないと収まりがつきそうになかったから。けれど、どう考えたってやっぱり理不尽だと思う。私は一応乙女だ。なぜ乙女が乙女をお姫さま抱っこしなけりやならんのだ。

身体を包み込むように作られた大きな籐の椅子はなかなか座り心地がよかった。メグさえいなければ。この子は見た目ちっこい体でも、テニスで鍛えこまれてるから結構重い。頭の中までとは言わないが、少なくとも大きい胸の半分くらいは筋肉で出来てると思う。いいや、これは決して私のやつかみなんかじゃない。

「ここ、素敵な部屋だね」

そう話しかけた兼巻君は、まるで雑誌に出てくるモデルのような仕草をしていた。長い足を組み、両手をお腹の上に重ね、深々と背もたれに身体を預けている。笑みを絶やさない柔らかな物腰もそうだけど、どう見ても彼は人が言う『一般的な変態』とは対極にいる気がした。

兼巻君は首を竦めた。

「そう言ってもらえると嬉しいな。苦勞した甲斐があったよ」

「苦労って？」

「ここに在る物の大半が貰い物とか拾い物なんだ。この応接セットだってそう。こんな新しくて立派な物が学校の側のゴミ置き場に捨てられてたんだ。経済大国日本万歳！　って感じだね」

死ぬまでに一度は何時か食べてみたい　焼きたてパンにマーマレードの朝ごはん　（字余り）

表情こそ穏健そのものだったけど、兼巻君の口調には私が懂れて止まない朝食のような、それでいてちつとも甘くない皮肉がたつぷりと塗りたくられているようだった。変態かどうかは知らない。けれど、どうもこいつはいけない。能面が貼り付いたようなこの笑顔、腹の中で何考えてるのか分かったもんじゃやない。朝の北町通りのラッシュで何時も聞く、信号を右折待ちの車が後ろから来た路面電車に鳴らされる警笛みたいな音が、私の頭の中を駆け巡った。そんな疑心暗鬼の中、兼巻君は私に尋ねた。

「なんか僕に用があるそうだけど、なに？」

「うん、ちよつと相談事と言うか、頼みたいことがあったんだけど……」

そう言い掛けて、私は考え込む。果たして彼に話してもいいものなんだろうか。勿論メグにも。特にメグなんて野次馬根性で私の膝の上に座つてるとしか思えない。

「そんなに見つめないで。恥ずかしい……」

うん、間違いない。

大体、調べるにしたってどうやって調べるといふんだ。例えばこの学校の図書館が、アカシックレコード的なとんでもなく素晴らしすぎる図書館だったとしよう。だったら『略夢に物を持って行く方法』なんてものが調べて出てきたりするだろうか。出てくるはずがない。略夢の存在定義は私の中にしかなく、しかもその定義さえ酷くあやふやな物なのだから。

「ごめん、やっぱり辞めとく」

「ええー、なんだそれ。期待してたのに」

メグがブーイングを飛ばした。いや、もつともです。私はぺこりと頭を下げた。兼巻君が身を乗り出してきた。

「わざわざこんな所まで来たってことは、そっちの方の話なんだろう。自分で言うのもなんだけど、僕はその手のことは良い相談相手になれると思うよ」

「それは私からも保証する」

さつと手を上げて、メグがすかさずフォローを入れた。この変態には勿体無い嫁さんだと思いつながら、私は二人に向かってこくりと首を振った。

「うん。私もその辺りは信じてる」

こんな所で、おそらく一人で活動が続けてるんだ。狂気じみた執着があるからこそだろう。でも

「なんか弱みを見せるようでヤダ」

兼巻君はぽかーんと口を開いて固まった。それから「君らしいね」と大声で笑い出した。

「壊れた？」

「壊れた」

何がそんなに可笑しいんだろう。何時までも笑い続ける兼巻君を私は気持ち遠巻きに眺めていた。

12・交渉

「しかし参ったな」

ようやく笑うのを止めた兼巻君は深刻そうに頭を抱え込んでそうつぶやいた。ちらりと手の隙間から私を見ながら。

「何が参ったの？」

「いや、だったら僕も君に頼み事をしようと思ったんだけどさ……」
「どんな？」

突然、ふつ、と耳に息を吹き掛けられた。ぞわりときた。私はにやにやと笑っているメグを睨みつけた。

「あーあ、聞いちゃった。知らないぞー。私があんなに警告したのに。後悔するぞー」

「だって如何にも構ってくださいつて素振りしてたじゃない」
「分かってないとはかりにメグは首を振る。」

「それが何時もの手なんだぞー。あいつは目的の為なら手段を選ばない男だぞー。きつと魂だつて既に悪魔に売り渡してるぞー」

「まるでファウストだね。でも確かにそんな感じするよ」

「だぞー。マコみたいなお人よしはばらんばらんにされて肉屋に叩き売られちゃうぞー。1ブロック198円だぞー」

「文字通り随分と安い女なんだな、私」

兼巻君が「コホン」と咳払いをした。

「君達さ、そういうのは僕の聞こえない所でするべき話だと思うよ」
すっかり見慣れてしまった笑顔は消えていた。細い糸のような目が幾分大きく開き、黒い瞳孔がじつと私を見つめている。まるで私の一挙手一投足を伺うように。ポケットの中に押し込められてしまったような息苦しさに、私は堪らず兼巻君から目を泳がせた。

「麻子」

萎縮して、思わず背筋を伸ばして「はい」と答えてしまった。何故出会ったばかりの変態にファーストネームで呼ばれなければなら

んのか。

「分つてると思うけど、『どうして』と聞いてしまったからには僕の話を実剣に最後まで聞いてもらうよ。でも安心して。愛琉はあんなこと言ってるけど、僕が君に頼みたい事はそんな大層なものじゃないから。けれどね、これは僕にとって切実なことだから。聞くからには必ず答えを出して欲しい。そして出来れば僕の満足のいくような。勿論断るのも引き受けるのも君の自由だけだね。分かるね？」
何だこの変わり様は。半ば脅してるのと変わらないじゃないか。私は無言で身を正した。

「ちなみに僕のことは『司』と呼んでくれたらいい」

……調子に乗んな。

「僕が頼みたい事、それは――」

と、空気を読まない女、メグが横槍を入れてきた。

「言つとくけど血は駄目だかね」

血！？ 突然こいつは何を言い出すんだ！？

「血はおろか、髪の毛の一本までマコは私のものなんだから」

メグの唇が私の首筋に迫った。はしとその口を手で塞いで、私はメグの耳元に囁いてやった。

「心臓に杭打ち込んだるか」

「ふおめんなふあい」

テニス焼けした健康的な吸血鬼なんていてたまるもんか。

兼巻君は苦笑いを浮かべ、「それは残念」と首を竦めると席を立ち、本棚の方へと歩いていった。

兼巻君はベッドに膝掛け、本棚を漁っている。

「何処にやったかなあ。使わないと思ったんだけどなあ」とか、

「あいつら滅茶苦茶やってくれるよ」とか、ぶつぶつ文句を言いながら。

一体何がしたいのやら、何をやらせたいやら。考えると不安で嫌になってきた。もういつその隙に逃げ出してしやるのか？

……高確率で『麻子』と名付けられた藁人形に、五寸釘ゴッスンゴッスン打ち込まれそう。第一、この重しが邪魔で動けない。こんなことなら、メグの忠告にもつと耳を傾けておけばよかった。

そう後悔する私の前に、兼巻君が「お待ちせ」と姿を現した。手に薄っぺらい紙を持って。

「はい、これが僕の頼み事」

何だろう。私はガラステーブルに置かれた紙に腕を伸ばした。が、その前にメグが素早く立ち上がりそれを掻つ攫っていった。

「うっん？」

メグは難しい顔をして紙を見ながら唸ると、一転して兼巻君に向かって「ふーん」とにやりと笑って、私に用紙を手渡した。何だあの笑顔、気味悪いな。私は手にした紙に目をやった。

「……入部届け」

「そうだよ。もしかしてクトゥルフ神話について熱く語り明かしたとか、コールド・リーディングと一緒にマスターしてみないとか、チュパカブラ探しの旅についてきて欲しいとか、僕と結婚してくれだとか、そんなの期待してた？ 残念だったね。クラスと名前と住所と連絡先、あ、そうそう。3サイズも忘れずに」

取り敢えずこいつとは命一杯話し合いをして絶縁した方がよさそう。まあ、それは何時か暇がある時に回すとして、あれだけ脅すようなことを言っておいて、頼みたい事ってのはこの程度のことだったのか。拍子抜けしてしまったその一方で、困ったなと私は思った。彼の頼み事が、クトゥルフ神話やらコールド・リーディングやらチュパカブラやらプロポーズやらムー大陸やらだった方がどれ程ましだったろう。何の遠慮もなしに「嫌だ」の一言で断れたらうから。しかし入部届けとは……。

兼巻君は頭を掻いた。

「いや、参ったよ。今まで部員が三人いれば部として存続出来たん

だけどさ、急にそれが五人になってね。急遽あと二人集めなきゃならなくなつてさ。しかも九月頭までだつて言うんだよ。学校は余程このプレハブ小屋潰したいらしい。部員からも話が違つて責められるしさ。いや、ホント参つた参つた」

本当に参っているのだろうか。愚痴を零すにしては yet たら明るい声と笑顔だ。そんな彼に数段声のトーンを落としてメグは尋ねた。

「で、その口ばかり達者な部員は何処で何をしてるんだ」

「さあ」と兼巻君は首を傾げる。

「何処かその辺りのゲーセンにでもいるんじゃない。元々授業サボるのに都合が善いからつて名前貸してくれただけの奴らだし」

「はあ……、呆れた。からかう気なくなつちつたよ。残念だけど司、その願いは叶わないよ」

「そうなの？」

私は「うん」と首を振つた。

「うち、両親いないし、小さい妹の面倒」

「もうね、それがめっちゃくちゃ可愛いんだよ！ つやつやでさ、すべすべでさ、そんでふわふわで。小生意気なのがまたもー！ あー、思う存分もふもふしたい」

興奮してすつ飛んできてでかい胸を擦り付けてるところスイマセン。最近は可愛くないんです。

「何だ、そんなことか。それだつたら何の問題もないよ。別に部活に出るなんて言う気ないし。ただ名前を貸して欲しいだけだから。いや良かった良かった。これで問題解決。この部は救われた。めでたいめでたい」

兼巻君はパンと手を叩いた。

「ちよつと待つた！」

押しのけようとしていた私を逆に押しのけるようにしてメグは立ち上がると、兼巻君を睨み付け、テーブルに左手をバン！ と叩き付けた。

「マコはまだ入るなんて一言も口にしてないだろう。第一、お前の

その計算奇怪しくないか？ まさか私も計算の内に入れてやしないだろうな」

「何言ってるんだよ。勿論入ってるよ」

事も無げに兼巻君はそう答えた。メグが声を張り上げる。

「なぜそうなる！ 私はテニス部だろうが！ お前私からテニスを奪おうってのか！？ 私からテニス取ったら何が残ると思ってるんだ。この美貌しか残らないだろうが！」

「それだけ残れば十分だろう。まったく、厚かましいな愛琉は。それに大丈夫だよ。調べたらうちの学校は部の掛け持ちOKなんだってさ。良かったね。大好きな麻子と一緒に部活だよ。僕には見える。この入部を切っ掛けに二人が辿り着く輝かしい明日、祝福のバージンロードが」

「……そんな分けないだろう」

何だ、今の一瞬の間は。

「あとで入部届け渡すからさ、必要なこと明記して持ってきてよ。それと3サイズはもう知ってるからいらないよ」

「なんで知ってるんだよ！」

エンドレス。放っておいたらこの二人は骨になるまでこんな言い合いをしていそうだ。私は手を上げて言った。

「入部する」

「はあ？」

「だから入部する。名前貸すだけでいいんですよ。困ってるみたいだし、それくらいだったら私も別に構わないから」

「ダメだよマコ。お天道様に顔向け出来ないようなことはしちゃいけないってお爺ちゃんお婆ちゃんに習わなかったの？ マコの綺麗な履歴に煙草押し付けてびって払ったみたいな真っ黒い染みが出来ちゃうよんだよ？ 汚れちゃうんだよ？ もう取れないんだよ？」

メグは私の肩を揺さぶり必死に引止めにかかった。たかが部活の入部に酷い言い様だ。何処かの宗教や市民団体に入る分けでもあるまいし。

と、

「認めない」

強い口調で兼巻君がそう言った。ぶるぶると肩を揺すっていたメグの手が止まった。私達は異口同音に「はあ？」と兼巻君に顔を向けた。

「だから麻子。君の入部は認められない」

「……司、お前一体何がしたいんだよ」

全く持つて同感だった。それにしてもメグを呆れさせるとは大したものである。

兼巻君は私に尋ねた。

「君は無償の愛って信じる」

一瞬おばあの顔が浮かんだ。私は

「信じる」

と首を振っていた。

「君は素晴らしい人だね。いや皮肉じゃないよ、誉めてるんだ。僕も信じてるよ。親が子供に与える愛情、それだけはね。じゃあそれ以外でそう呼べる関係はあるのかな？　ないよ。人は愛したいから愛するんじゃない。愛して欲しいから愛するんだ。そういう思いを互いに差し出し均等に分かち合つて、そうやって支えあつて生きるのさ。一方的な好意ならいらぬ。無償ではなく有償を。それが僕のポリシーなのさ」

「つまり何？　入部したいんだつたら私の頼み事を聞かせるよ、つてこと？」

「御明算」

面倒臭いやツ。回りくどいし。それにこんな取引つてあるだろうか。瀬戸際外交？　何でこんな上から目線なんだろう。でもどうして腹が立たないんだろう。

「駄目？」

兼巻君は笑った。今までの張り付けたような笑顔じゃなかった。はにかんだような、少し困ったような、そんな笑顔だった。本当は

この人はこんな風に笑う人なんだなと、私はそう思って首を竦めた。

「分った。じゃあそういう方向で話を進めようか」

「成立だね」

差し出された手に手を重ねた。膝に纏わりついたメグが気だるげな欠伸をひとつ漏らした。

13・スポットライト

「夢にはその時抱えている希望や願望、不安なんかが影響されやすいのは知っているよね」

校舎の影がこの部室にも差し込んでいた。時間が経つのは早い。二日連続で朔に冷たい目で詰られるのは流石に嫌だ。

私は「夢に物を持ち込む方法」を兼巻君に尋ねた。

それを聞いたメグは、子供みtainな事を言々と私を笑った。人がどんなつもりで『夢』という言葉を使ってるかも知りもしないで。メグの頬をぐにぐにひっぱりながらちらりと兼巻君の表情を伺うと、あの笑顔で私にそう尋ねたのだった。

私は頷きもう一つ付け足した。

「寝ている時、外からの刺激にも影響されやすいって言うよね」

例えばテレビドラマを見ながら眠ってしまったら、夢の中で自分がそのドラマに登場していた。似たような体験、誰だっけした事があるだろう。

「そうだね。まるで夢は取り扱いの難しい劇薬みたいだ。ちょっとした刺激にすぐに反応してしまうんだから。」

ああ、でも小説や映画なんかで夢と現実とが区別付かなくなっちゃう話が結構あるじゃない。あれって実際さ、ドラッグやアルコールに頭が犯されているか統合失調症でも患わってなけりやまず在り得ないよね。ごく全うに生活している至って健全な人だったら、その境が分からないなんて事まずないもん。そう考えると劇薬ってのは物騒な例えかもね」

統合失調症。

一定に保っていた私の胸のリズムが狂う。もしかして私は……。違うと言い切れる自信が私にはまるでなかった。

私の不安を他所に兼巻君は話を続ける。

「そもそもこの夢ってヤツは一体何なんだろうね。夢は僕達にとって何がどう必要なものなんだろう」

「必要？」

「そう、必要。指先にトゲが触れてしまった時、僕達は反射的に手を引っ込めるだろう。そうしなきゃトゲは皮膚の奥深くに潜り込んでしまう。この季節になると汗が止め処なく流れてくるよね。そうしなきゃ熱中症になってしまう。時々邪魔臭くなってしまうような体の反応。だけど、全て僕達にとって必要なものだから備わってるんだ。だったら夢だってそうなんじゃないのかな。人にとってそれは必要だから僕達は夢を見るんじゃないだろうか」

そんな風に考えたことなんてなかった。もし私が今でも夢を見続けていたとしたらそんな面白いアプローチを取れたらうか。私は彼に感心しつつ夢の必要性を考えてみることにした。

「……忘れるため」

思い当たる節もあって、私はそう答えることが出来た。へえ、と兼巻君が身を乗り出してくる。私は何時か見た夢の名残を思い返ししながら慎重に言葉を選んだ。

「夢って中々覚えてられないものだよね。とても綺麗で面白くて、それが夢だと分かっている、忘れないようにしなきゃって何度反芻しても記憶の中に閉じ込めることが出来ない。目覚めたら素敵な夢だったって感想だけが残って、中身はすっかり忘れてしまっている。小さな頃、それが不思議でなかった」

兼巻君がこくりと頷く。私はまた話を続ける。

「私達は毎日毎日色んなことを目にして、色んなことを耳にして、肌に触れて、様々な体験をする。それがさして取り留めの無い体験なら気にも留めないんだけど、もしそれが重要な体験であるなら口の中で何度も繰り返し返すなり、メモを取るなりして記憶しようとする。

つまり情報を選び分けしてる。

でも、人はそんなに器用に出来てないんじゃないのかな。私達は情報を選び分けて記憶するなんて事が本当は出来なくて、例えばまったく意味を為さない音や映像の断片すらも、そのままに全部頭の中にインプットしてしまってるんじゃないのかな」

うーん、と腕組みをして兼巻君は唸ると、

「どうしてそう思うの？」と私に尋ねた。

「夢は色々な影響を受けやすいって言ったでしょ。人は寝ているとき内側を向いてるはずだね。つまり精神的な所に意識が向いてるはず。なのに外で起きてる事も夢に影響を与えてしまう。これはつまり無意識であつても人は情報を拾い集めてるって事だね」

「なるほど。裏を返せば意識的に情報の遮断は出来ないって事になるね。じゃあそうやって無意識に拾い集めてしまう情報が、頭の中から簡単に引つ張り出せるものと出せないものに別れてしまうのは何故なんだろう」

私は俯く。こんな話に参加する気はまったくないのだろう。私の膝に頭を預けて微睡んでいるメグの旋毛に目をやる。かき混ぜるだけかき混ぜていい気なもんだ。

「これはイメージなんだけど……」

ウィリアム・スタンリー・ミリガンを知ってる？

私は顔を上げ兼巻君にそう尋ねた。彼は小首を傾げた。

ウィリアム・スタンリー・ミリガン。

1955年2月14日、アメリカ合衆国生まれ。

1977年、3人の女性に対する連続強姦及び、強盗の容疑で逮捕される。

精神鑑定の結果、解離性同一性障害と判明。
通称、ビリー・ミリガン。

「それって『24人のビリー・ミリガン』の？」

「そう。読んだ？」

勿論、と兼巻君は頷いた。だろうなと私は思った。如何にも彼の興味を惹きそうな実話ではないか。

解離性同一性障害、いわゆる多重人格障害者だったビリー・ミリガン。彼の中には年齢も性別も出身国もバラバラな24人も的人格が存在していた。

安全な場所にいるときに他の人格たちに対して支配権を持つ『アーサー』。逆に危険な状況の時に支配権を持つ、アドレナリンを自由に操る空手の達人『レイゲン・ヴァダスコヴィニチ』。交渉役の『アレン』。苦痛の管理者『デイヴィッド』。隅の子供『クリステン』……。

「覚えてる？ 彼らにはそれぞれ役割があつて、人格を交代するときは暗闇を照らす『スポット』と呼ばれる光の中に立つ事で、表に出てくることが出来た。

頭の中から簡単に引っぱり出せる記憶と出せない記憶。その違いはスポットによって見えるか見えないか、ただそれだけの違いなんじゃないのかな。常に光が当たっているスポットには、覚えておきたいことや意味のある記憶が。スポットの外には、どうでもいいことや意味のない記憶があるんじゃないかな」

兼巻君は口を挟まない。糸みたいな目を更に細めて頷くだけだ。私は話を続ける。

「知覚から得た情報の全てが無条件で記憶されてしまうとするとするなら、何時かはそれを整理しなきゃいけない。じゃないと頭の中がグチャグチャになってパンクしちゃうだろうから。でも起きている時に整理出来るのはスポットの中の記憶だけだね。だったら寝ている時ならどうか。スポットはなくなっていて、暗闇にある記憶も整理

されているんじゃないのかな。そして記憶の整理が夢になって現れるんじゃないのかな」

夢は大抵無茶で辻褄が合わない。多くの矛盾で溢れている。なのに妙にリアリティがあつて、それが夢だと中々気付かない。それはきつと、意味のある記憶と意味の無い記憶が混ざり合つてるからなんだろう。

「だったら夢は忘れる為にあるんじゃないくて、情報を整理する為にあるんじゃないか」

兼卷君の浮かべる微笑がどうにも意地の悪いものに見えた。私は左右に首を振った。そうじゃない。そうじゃないけれどそうじゃない。これはどちらが寄り重要かという問題なんだ。

私は兼卷君に言った。

「忘れるつてそんなに簡単なことなのかな？ 嫌な事や辛い事や悲しい事、そんなのを簡単に忘れてしまえたらどんなに幸せだろうね。日々尽きることもない情報を整理していくのは勿論大切なことだけど、でもそれ以上に人は忘れることの方が大切……、ううん、必要なんじゃないのかな」

こんな時、言葉の限界を感じてしまう。自分の伝えたいことが上手く表現できない。それは自分がまだ言葉を知り足りないからかもしれない。それでも私は私を知る中で、辛抱強く我慢強く言葉を選ぶんだけど、でも何処かで力り力りした苛立ちを隠している。

暫く沈黙が続き、私は我に返つて思わず謝った。

「ああ、ゴメンね。単なる私の適当な意見だから。適当に聞き流しておいて。うん」

「何いつてるんだよ。いいよ、凄く良い。その調子でどんどん行こう」

兼卷君は幾分早口にそう言いながら何度も頷いた。興奮してるよだった。

困った事になってしまった。

促されるまま、私は兼卷君の質問に答える……。

14・予言

「じゃあさ、そうやって忘れてしまった夢は何処へ消えて行くんだろ。スポットの外、暗い片隅にでも追いやられてしまうのかな」
また兼巻君が奇怪なことを聞いてくる。口調は少し早口で、細かな震えさえはらんでいるようだった。

やっと同士に出会えた！ そう言わんばかりの熱を感じた。けれど彼が期待を込めて私をみつめる程に、私は - 273・15 の世界に放り込まれた気分になった。そうなると面白いもので、今までフィルターを被せたような狭い視界の中にいたことに気付く。どんどん視野が広がっていく。……まあ、簡単に言くと恥ずかしくて堪らなくなっただけだ。

こいつ私以上に友達いなさそうだな。

我ながら恐ろしい程に冷めた目で彼をそう評しながら、投げやりには私は答えた。

「例えば部屋に簾をかけるじゃない。ちりとりでゴミを掬うじゃない」

「ああ」

「そうすると掬いきれない埃が線を引いてちよつとだけ残る。あれイライラするんだけど」

「あー、まあ、分かるよ。うん」

「そういう時私は変なところで物ぐさだから、埃を物の陰に追いやってたりしちゃう。じゃあこれは果たしてゴミを捨てたことになるんでしょうか？」

「ならないね」

「でしょう。そういうことだよ」

私はメグの頭に手を伸ばし絹の糸みたいな柔らかくて豊かな髪を梳く。アールグレイの色した髪は闊達な彼女によく似合っている。猫の毛並みをブラッシングしてるような気分に和んでいたら、兼巻

君が口を挟んでくる。

「いや、だったら何処へ消えるんだって話」
「やれやれ。私はため息を零す。」

「その消えるってのが問題だよ。夢ってさ、シャボン玉みたいに弾けるってイメージがあるよね。儚いものだからだろうけど。でもそんなパソコンのゴミ箱に放り込んで一括消去しちゃえるようなデジタルな代物なのかねえ。なんと言うか……」

顎に手をやり、私は兼巻君から目を泳がす。私の考え込む時の癖だ。

「なんと言つか、寝た子を起こさないようにずっと奥深い所へ……埋めちゃう？ その先は知らないけれど」

「埋める……」

兼巻君は声を殺して笑った。それから私からメグへと目を移した。目も口元もより柔らく変わる。

「愛琉が君を好きなのが分かった気がする」

柔らかな笑みがメグから私へと移る。「僕も君のことが好きだよ」そんな囁きさえ聞こえてきそうだった。私は顔を伏せた。足元から心臓へ、心臓から顔へと血が逆流したように顔が逆上してしまっていたから。

「カール・グスタフ・ユングを知ってる？」

「心理学者の偉い先生」

それだけ。ようは知らない。

「そう、そのお偉い先生。ユングはこう言ってる。僕達の魂と呼べるものは『意識』と『無意識』に二分され、そして無意識は更に『個人的無意識』と『集合的無意識』に分けられると。君が言うスポットってヤツは意識。で、その外は個人的無意識と呼んでいいだろうね」

「個人的無意識と集合的無意識」

「個人的無意識は無意識の中でも意識に近い層だと言われている。抑圧から生じる意識の住み家、ようは心の吹き溜まりみたいな所だ

ね。

ビリー・ミリガンだけど、彼は幼いころ義理の父から虐待を受けてきた。そんな現実を抱えて生きることなんて幼い彼に出来るはずがなかった。だから彼は自分を守る為に忌まわしい記憶を追いやった。その追いやった先が個人的無意識だ。記憶は表面的には現れない。けれど意識に近いから心に影響を与えてしまう。そしてビリーは解離性同一性障害を患うことになってしまっわけ。いや、記憶を追いやった時にはもう患っていたのかもしれないけどね。

……それと一応言っておく。解離性同一性障害は多重人格障害じゃない。それはかつての話だ。メディアはおもしろ可笑しくそればかりを切り取って伝えているけれど、多重人格障害は解離性同一性障害の多々ある症状の中の一つに過ぎない。幻覚や幻聴、過去の虐待を擬似体験するようなフラッシュバック、睡眠障害、男性恐怖症、その他諸々の症状を抱えている。そちらの方が患者にはより辛い。僕は『24人のビリー・ミリガン』はショッキングな話題ばかりが先行してしまつて、肝心の中身を誰も真剣に取り合つてないんじゃないかと思うんだ。フィクションであつたならそれでいいんだけど、あれは事実あつたことだ。解離性同一性障害に苦しんでる人達は今だつて大勢いる。あの本は間違つた解釈を与えてしまいかねない罪作りの本になってしまったんじゃないかなつて、そんな気がする」

半ば右から左に受け流しながら、私は「はあ」と答えた。

首を振り疲れたようたため息を一つ零して、「もういいや。話を戻そう」と、兼巻君は話を続ける。

「さて、もう一方の集合的無意識についてだ。こいつは、ある人は幸せになる為のキーポイントだと言い、ある人は全ての宗教の源だと言い、ある人は遺伝子の記憶だと言い、ある人は理想郷だと言っている」

「途端に胡散臭くなつたな」

「いや、まつたく。実に僕好きな世界観だ」

お前の好みなんかどうだっていい。

「肝心のユング先生は何て言ってるの？」

「人間の無意識の深層に存在する個人を越えた、集団や民族、人類全体が共有する普遍的な心」

私は「さっぱり分らない」と首を振る。

「母親と聞いて君ならどんなイメージを浮かべる？ 『優しい』とか『温かい』とかそんな言葉を思い浮かべるんじゃないかな。そういう誰もが共通して持つてるイメージがある場所、それが集合的無意識だ。ちなみにそんな普遍的なイメージをアーキタイプ、元型と言っ」

「ふーん。思ったよりまともなこと言ってるじゃない。どうして宇宙人がいるぞ的な胡散臭い話として受け取られてるのかな」

兼卷君は肩を竦める。

「それは僕が、八尾山も富士山も兎越山も同じ山だって言うくらい平たく均して説明してるからなんだけどね。実際ユングはとっても電波なことを言ってるから。」

考えてもご覧よ。ちっぽけな人の体の何処かには宇宙にさえなぞられる程の広大無辺な世界が広がっている。そしてその世界は人種も文化も時間さえも飛び越えて、全ての人と繋がっている。こんなものに出会ったら無理にでも答えを出したくなってしまう。無条件に受け入れるなんてこと出来ないから。ましてそれが誰も立証できない壮大で神秘的なものであるなら、そこに今抱えている問題を当てはめて、身勝手な超解釈を誕生させてしまいたくもなるだろうさ」

「それはいわゆる現実逃避って言っんじゃないの」

「言葉が悪いなあ。夢見がちな素敵な人だと言おうよ。事実そういう人達が世界を揺り動かしてきたんだから」

天才と凡人と狂人、その差は紙一重。彼の話を聞いていると本当にそう思えてくる。私はふと下らない妄想を浮かべてしまった。夢見がちな素敵な人が溢れすぎたら、一体この社会はどうなってしまう

うんだらうと。それでもきつと、社会は何事もなく廻るのだらう。それは何処かで誰かがとんでもない苦勞を背負い込んでいるのからなのか。それとも皆が皆、醒めない夢を見続けているからなのか。

兼卷君が頭を掻いて言う。「どうも話があつちこつちに寄り道してしまふな。君と話するのは楽しいから」と。何となく照れ臭い私は俯く。一呼吸置いて彼は話を続ける。

「個人的無意識にしても集合的無意識にしても、その名が表すとおり無意識の領域だ。無意識つてのは当たり前だけど意識を保つたまま到達出来るような所じゃない。けれどアプローチは出来る」

ビリー・ミリガンを思い出し、私は「催眠術？」と兼卷君に尋ねた。彼は首を振る。

「うん、それも一つの方法だ。けれどももっと簡単な方法がある」
夢だ。

兼卷君はまじまじと私の顔を見つめそう言った。興味深く私の反応を待っているように。彼の期待に答える理由もないけれど、私は彼に尋ねずにいらなかった。

「当たり前だけど、結局のところその問題へと還つてゆくんだよねえ、もしかしてだけど、兼卷君は私を疑つてる？」

兼卷君の顔から笑顔が消えた。

「ああ、その通り」

そのまま、兼卷君は暗がりにも隠れていく。校舎の影が染み渡るように部屋を暗く閉ざしていく。彼は立ち上がり入り口へと歩いていく。私はメグの髪を撫でながら、彼が席を外した先の窓の外を、茜色に染まりつつある空を眺めて覚悟する。部屋に明かりが付き、再び彼が私の前に現れ、笑顔で私に言う。

「その通り、だった」

「だった」

「そう、だった。ついさつきまで君は僕のことを知らなかった。僕は君の噂をかねがね聞いていた。完全無欠の完璧超人みたいな女の子だってね。でもそれだけ。お互い知らない二人だったわけだ」

「うん」

「そんな君が僕の所へとやってきた。君には何とも不似合いな場所だ。態々足を運んできて何を言うのかと思えば、『夢に物を持ち込む方法』なんてものを尋ねてきた。僕は思った。参ったなつて。この女の子は夢と現実の区別がつかないのかつて。重大な精神疾患を抱えてるんじゃないのかつて。でも話してみて分かった。その心配はないつて」

少し意地の悪い気分で私は兼巻君に「本当？」と尋ねた。彼は苦笑いを浮かべ「多分」と首を竦めた。それからそう言ったことを改めるように左右に首を振った。

「君の発想はとてもユニークだったよ。でもそれだけじゃない。説得力がちゃんとあった。それは君が理を持って論じたからだ。君は夢と現実の区別がつかない女の子なんかじゃない。保障する」

「そう、良かった」

「だからこそ気になる。どうして君がそんなことを……、いや、違う」

兼巻君はまた首を振り、真っ直ぐに私を見つめて言った。

「部を存続させたいから名前を貸してくれて、君に頼み事をする。あれ訂正させてもらえないかな。僕は君が気になる。だから正式に君をこの部に招きたい。僕には君が必要だ」

私の中の何かが乾いた音を立てた。巡る血が物凄い勢いで集中してくる。頭がのぼせる。

「いや、だから、それは、無理だよ」

ぐにぐにと、私はメグの額を指で捏ね押した。メグが不快な顔を浮かべてうーうー唸る。でも私は構わず押した。

「僕は決めた。君と僕の出会いは、意味のある偶然の一致なんかじゃない。僕は予言する」

兼巻君は指を突きつけて言った。

「僕が君を必要とするように、君は僕を必要とする。必ずそうなる」

15・ハグロトンボの羽根、ハリネズミの孤独

私はハグロトンボの羽根を思う。

円筒の上に私は立っている。辺りは暗い夜が何処までも続いている。白い網の目の床、出来損ないの半掛けのドームが影を作っている。ここには入り口も出口もない。

私はハグロトンボの羽根を思う。

強い風が吹いている。白いワンピースの裾を押さえる。顔に張り付く髪を掻き分ける。私は円の真ん中に立つ。大きな赤い月を見上げる。ハリネズミの孤独を思い、吐き出す息が震える。漂う靄は銀の光放つ刃物のように滑る。それは月の光を受け、私の胸を突き刺したかのように赤い花を咲かせる。痛みはない。私にもともと痛みなんてない。

「綺麗な月だ」

真後ろに立つ彼が言う。何時の間にかそこにいる。私はそれを受け入れる。「ええ」と月を見上げたまま頷く。

「鮮血の色に似てる。酸化する前の血の色だ」

ごぼり、私の中の何かが沸き立つ。不快な気分が込み上げる。これは何だろう、私は思いながら「ええ」と頷く。

「僕は君を探していた」

そう彼は言う。私は言う。

「私は貴方を探してたんだろうか」

そんな気もするし、まるでそんな気がしない。何もかもが鈍く、虚ろで、深い海の中を懸命に走ろうとしている感じがする。

私はまた言う。

「私は貴方の失った半身なんだろうか」

彼は言う。

「どうしてそんな悲しいことを言うの」

悲しい？ どうして？ 私は月に手をかざす。

「だって私はこんなにも薄っぺらい。今にも消えて無くなってしま
いそう。もし私が貴方の半身だと言うのなら、私は貴方に還るだけ。
それで全ては終わるから」

「違う。君は僕の半身なんかじゃない」

彼はそう否定する。どうして違うのか、私には理解できない。私
は尋ねる。

「私と貴方はこんなにも似ている。なのに、何処が如何違うと言っ
たの？」

「違うよ。僕と君は決定的に違う。僕は本をよく読む。君は？」

「好きだよ。よく読むよ。ほら、同じじゃない」

「違う。僕はもっと知識を広げたいから本を読む。君は言葉の限界
を超えたいから本を読む。自分の中にある確かなイメージを少しで
もリアルに表現したいから本を読む。けれど君は本を読むほどに枯
れていく。この世の中にあるありとあらゆる言葉を持っても、
君のイメージに辿り着くことはない。それを君は知っている。歯が
ゆく思っている。それでも何時か出会えると思い、君は本を読み漁
る」

私は振り返る。そして彼に言う。

「まるで予言のようじゃない、兼巻君」

「そう、その通りだよ、麻子」

兼巻君はそつと私の髪を手取る。

「君はすっかり疲れ果ててしまっている。移ろう時間を機械的に見
送れるほどに君はまだ年を老うてはいない。君は切り離れた時間の
断片の中に君を封じ込めた。ここから出してくれと君は言う。君は
宥める。時が来れば必ず出すと。それまではここにるのが一番の
幸せなのだ」

「それが今なの？」

彼は首を振る。

「まだ。……そう聞いて君はまたひとつ老いた気分になる。内から
も外からも囃されて、君は今にも擦り切れてしまいそう」

彼は私を哀れむ。彼は私を哀れむ。

「私はやっぱり貴方を探してなかったんだと思う」

「そうなのかい」

「うん」

「僕は必要ないのかい」

私は首を振る。

「そうじゃないの。必要とか必要じゃないとかじゃないの。貴方に哀れまれてしまったら、それを受け入れてしまったら、私はもう二度と貴方の前に立てなくなってしまう。永遠に貴方の背中を追い続けることになってしまう。そうはなりたくないだけ」

彼は首を竦める。首を振る。

「君は我がままで意固地で鋼のようで。だからこそ美しい」

彼の手は髪から耳たぶへ、頬へ、唇へと伝った。すつと彼の顔が近づく。彼の唇と私の唇の間に手を割り込ませる。尋ねる。

「貴方は誰？」

彼の手を払いのけ、私は逃れる。何処へ？ ドームの下、白い壁際へと。違う、ここには出口なんてない。

「そう、ここには出口も入り口もない。君は僕から逃れられない」
声が遠く近く木霊する。私は壁に張り付き彼を睨む。彼が一步足を踏み出す事に、私も一步横へとそれる。

「君は美しい」

声は背後から聞こえた。私の体が何かに抱きすくめられた。冷たい感触。途端に全身が粟立つ。何かは衣服を易々と乗り越え、地肌を這い回る。

「君の目は美しいものしか見ようとしなない」

彼が一步近づく。私は動けない。

「君の耳は美しいものしか聞こうとしなない」

彼がまた一步近付く。私は動けない。

「君の鼻は香しいものしか嗅ごうとしない」

彼は目と鼻の先だ。私は逃れられない。

「そして君の唇は美しい言葉しか囁らない」

私の口を彼は塞ぐ。舌が絡みつく。唾液が送り込まれる。獣の臭い、強い腐臭が混じる。私は顔を背けそれから逃れる。したたかに吐く。彼は兼卷君じゃない。兼卷君じゃない。

「君は本当に我がままだ。僕を求めておきながら、僕をいらないと言う」

「私は何も求めてなんかない」

乱暴に彼は私の髪を掴む。強く、耄り取るように掴む。私は悲鳴を上げる。

「君は導いてくれる者を求めた。君を慰めてくれる者を求めた。君は何時だって誰かに何かをしてもらいたい。誰かに何かをしてやることなんて考えられない。だから君は求めたんだろ。そんな自分を滅茶苦茶に壊してくれる者を」

彼は私の頭を壁に叩き付ける。言う。

「幸いにして僕は男で君は女だ。何度でも何度でも、僕は君に注ぎ込んであげる。何度でも何度でも君を穢してあげる。何度でも何度でも粉々になるまで搗り潰してあげる」

彼は冷ややかに笑う。死刑を宣告する。

「虚ろに、白痴に、在るがままを受け入れろ」

私はハリネズミの孤独を思う。

私はハリネズミの孤独を思う。

ハリネズミの孤独を思い、ハリネズミの孤独を背中に宿す。体を這い回る何かに針が突き刺さる。酷い悲鳴が木霊する。私は彼の手から逃れ、真っ直ぐに走る。転落防止の柵へと真っ直ぐに走る。

高く足を跳ね上げた瞬間、暗闇に身を委ねる恐怖が私を包んだ。けれど私はハグロトンボの羽根を思う。ハグロトンボの羽根を背中に宿す。何処までも私は飛んでいける。あの赤い月にさえ手が届く。地面を蹴り、柵を蹴り、私は暗闇に身を投げ出した。

「おめでとう」

投げ出す間に、私は柵に立つ彼を見た。彼は笑顔で拍手をしてそう賛辞を送った。それから、不吉な言葉を残した。

「また会おう、麻子くん。次に会う時は、二度と醒めない悪夢を君にプレゼントしてあげる」

暗闇に包み込まれるように、私と私の体は四散し、消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338d/>

バク（休止中）

2010年10月12日13時57分発行